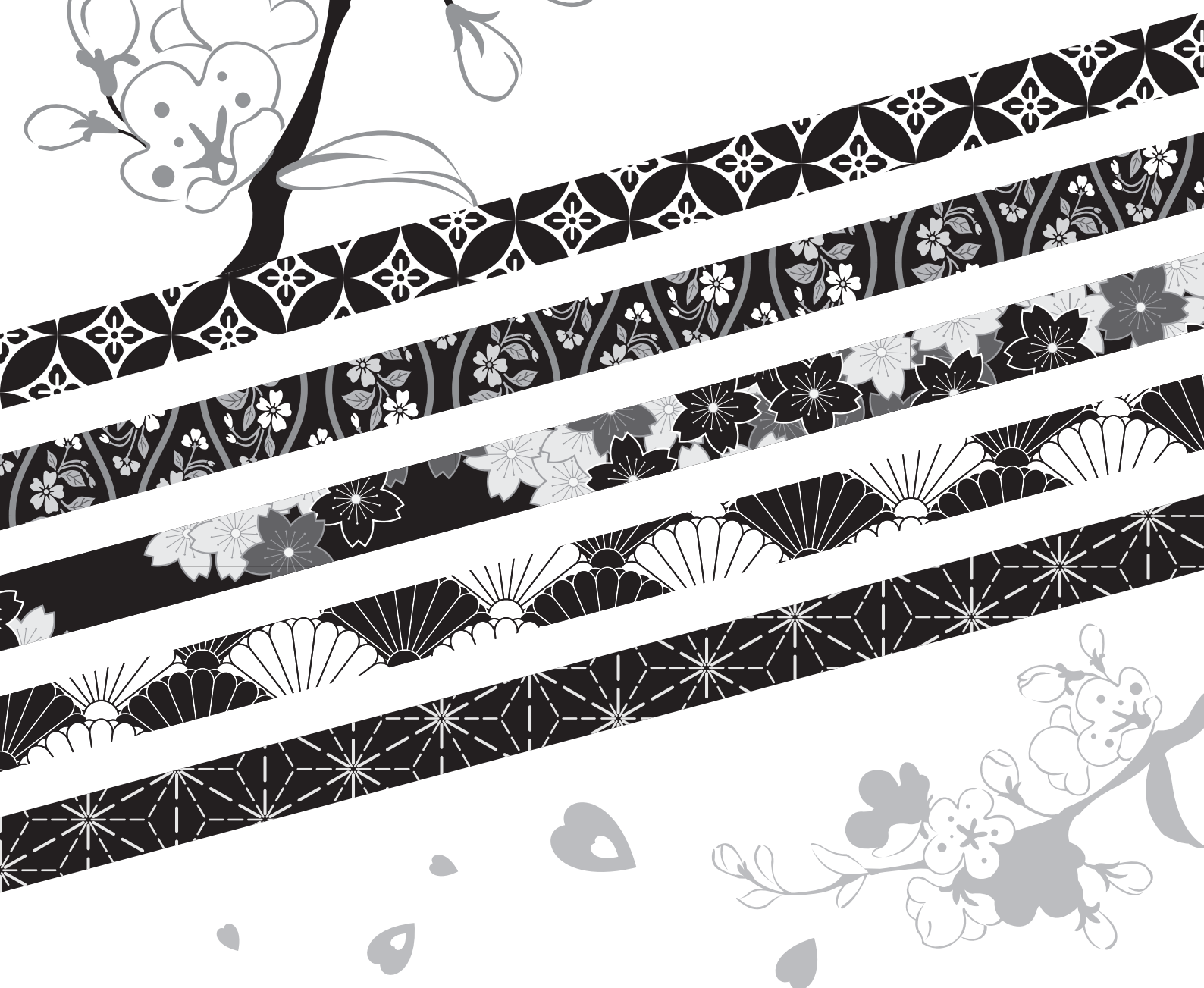




平成 21 年度
卒業記念文集
memorial of graduation



まえがき

この冊子に関して述べさせていただきます

《導入》

卒業生の皆様に、「卒業文集」なるものを書いていただきました。その文集を掲載させていただいております。しかしまだ完璧ではありません。そこで、卒業生に各自、自分だけの「卒業文集」を完成させていただきたいと思います。

《方法》

まず、一通り目を通していただきたいと思います。しかし今は慰労会の最中。がっつり読むとそれだけで慰労会が終わってしまいます。なので、サクッと読んでください。あいつこんなこと書いているよ…って感じに見てください。そして困ったときには話のタネにもしてください。

次に、卒業生の文集の次のページ、巻末に「☆寄せ書きのぺえじ☆」なるものがあることを確認してください。そこはこれから卒業生各自で埋めていただくページとなっております。あの人に書いてもらいたい…そんなことを思っているあなた。チャンスは今しかありません。また、卒業生だけでなく、お世話になった先生方、並びにお世話した後輩にも書いてもらうなど、人によって多様性がでるページとなっております。慰労会の最中に時間がありましたら、ぜひ埋めていただきたいと思います。ペンは机の上に配置済みです。

《結果》

慰労会の最中に完成させる必要はありません。時間をみつけて埋めていただけたら、と思います。いつの日か、完成させてください。

《考察》

完成した後、メッセージを確認してください。4年間分…とまではいかないとありますが、この冊子が卒業生の思い出の一部になれば幸いです。

提出期限はありません。各自、保管してください。筑波大学での生活を思い出したくなった時、再びこの冊子に手を伸ばしていただけると幸いです。

なんて固いことを言ってしまいました(●´ω`●)ゞ

慰労会の最中に時間を見つけたら書きましよう☆んでもって、思い出の冊子にしようねー☆(´▽`)

特集：卒業

筑波大学生活 5 年間

～自分に鞭を打ち続けた 4 年間、自分を見つめ直せた 1 年間～

大住 貴之（筑波大学 生物学類 4 年）

地元兵庫県明石市を飛び出し、遠く離れたつくばの地で過ごすこと早 5 年。入学当初 18 歳だった自分はもう 23 歳になり、社会という新たな世界に足を踏み入れようとしている。私は 4 年生のとき、一度留年している。今回、卒業文集では、大学生活を振り返り、良いところも悪いところも含め、自分自身を見つめ直し、あえて自分をさらけ出していこうと思う。反面教師になってもいい。読んで頂く皆様に何か伝わればよいなと思う。

思い返せば高校 3 年生の冬、入試が終わり、がっくりと肩を落としていた矢先に合格通知が届いた。嬉しかった。とにかく嬉しかった。今までの人生であんなに喜んだことはおそくなかったであろう。がむしゃらながらも一生懸命勉強してきたよかったです。よく頑張ったなおれ。と自分を褒めつつ、これで人生は安泰、将来余裕、などと馬鹿な考えを持っていたのもこの頃だった。大学に入って苦勞することも知らずに……。

そして 18 歳の春、私は単身上筑、筑波大学第二学群生物学類に入学した。希望に満ちあふれ、大学生活を満喫する……はずだった。しかし入学早々、私の前に壁が立ちはだかかった。何もかもが「できない」のである。勉強も「できない」、運動も「できない」、気配りも「できない」、人間として「何もできない」。周りからもできないと言われ続けた。高校まで満ちあふれていた自信が一気に無くなった。今までいかに甘く、狭い世界で生きてきたのか思い知らされた。他の人から見ればなんてことないかもしれないが、自分にとっては一大事だった。目標すら見失った。

しかし私はここで食い下がる訳にはいかなかった。一生に一度の大学人生、このままでいいのか。有意義な時間を送るにはどうすればいいのか。考えに考えた。結果、勉強と教員免許の取得、そして体育会系の部活との両立を大学生活の目標に掲げて日々を過ごしていくことに決めた。やればできるということを証明したかった。もちろん反対する人、白い眼で見る人もたくさんいた。馬鹿なお前にできるはずがないと。でも私は決断した。応援してくれる仲間がいたからだ。生物学類の友達、部活の先輩、同期、色んな人々から色んな励ましの言葉をもらった。その中で、二つ、特に心に残っている言葉を紹介したい。この言葉のおかげでここまでやれてきたのだと今は思っている。

「楽しいという思い出は楽しいだけで終わる。それもいい。ただ、苦勞して達成したものは、それを超える計り知れない充実感がある。」「できる、できないは関係ない。大切なのはやるかやらないかだ。」「今までは何をやる前も、「できない」の一言で終わらせていた。でも、そんな自分が嫌いだった。その気持ちを払拭しようと、私はがむしゃらに大学生活を過ごしていった。勉強、部活、何においても一生懸命に取り組んだつもりだ。自分に鞭を打ち、休日も休みがないほど、とにかく一生懸命だった。とりあえず、やろうという精神で取り組んできた。苦勞だらけだが、充実感もあった。

しかし、ほぼ不眠不休の生活を繰り返していた一度目の 4 年生の春。教育実習を終えたときのことだった。今までの無理がたたったのだろう。ついに身体が悲鳴をあげた。急に身体が動かなくなった。涙もなく涙がこぼれ落ち、精神的に不安定な日々が続いた。私は研究室を休み、実家に帰り、しばらく休養することになった。休養中、色んな考えが頭をよぎった。研究室や部活の皆さんに迷惑をかけてしまったという申し訳ない気持ち。また、大学時代にしてきた色んなことを後悔する気持ち。なぜ勉強してきたのか、なぜ部活をやってきたのか……やはり、自分ではできないダメ人間なんだ。明らかに迷惑者だ。居ない方がいい。目標も失い、後悔と不安、自責の念が私の心を蝕んでいった。僕は……落ちた。

しかしこの落ちたことが、私の人生を大きく変えることとなった。意図的に留年した。そしてできた時間が自分自身を見つめ直す良い機会になったのである。私は自分自身と初めて深く対話した。今までがむしゃらになって色んなことに取り組んでいた分、本当の自分と向かい合わないままここまでできてしまっていたのに気がついた。私はプライドと周りの評価に気をとられすぎていた。「できない」という概念もそれらが邪魔して生まれたものだった。でもそんな中、私は新たな道を見みつけることができた。そして就職活動をし、縁あって第一志望の会社に内定を頂いた。しっかりと自己分析できた結果とも思っている。今まで決してとることなかった積極的な休養が、私を良い方向に導いてくれた。

自分は自分。唯一無二の存在である。マイペースに生きてもいいじゃないか、そういう考え方も生まれてきた。それを教えてくれたのは、他でもない、迷惑をかけたはずの親や、生物学類の友人、研究室の方々、部活のメンバー、そして同じ悩みを抱えていた人たちだった。こんなどしようもない自分にも皆さんはあたたかく接してくれた。救われた。本当に救われた。

私は、4 年間の大学生活に全てをぎっちり詰めようとした、自分自身に鞭を打ってまで。その結果、1 年間遠回りした人生になってしまった。この間に失ったものも正直たくさんある。

しかし、それ以上に得られたものもたくさんあった。今までは自分と向き合うのが怖くて逃げていた。でも本当の自分自身に気づくことができた。また、周りの人々のあたたかさ、自分自身を大切にするという考え方など、人生において大切なことをこの 1 年で気づかされた。もちろん一生懸命やってきた勉強や部活にも後悔の念は無い。普通に大学生活を過ごすこともできただろう。でも、苦勞して得たものは今では自分の財産になっているほど大きい。波乱の大学生活であったが、今では良かったと思える。たくさんの方の励ましを勉強させてもらった。充実していた。

最後に、私に携わってくださった方々に心よりお礼申し上げる。本当にありがとうございました。これからも体調に気をつけてマイペースで、感謝の気持ちを持って頑張っていきたいと思う。

特集：卒業

(・▽・)

赤星 渚（筑波大学 生物学類 4年）

入学してから早4年…

いろんな人に出会いました。

いろんな所に行きました。

最後に

この4年間に会ったすべての人に
感謝の気持ちを込めて…

いろんな物を食べました。

いろんな思い出が出来ました。

ありがとう。

数々の素晴らしい思い出は、

ここでは語り尽くせないので省略ということで。

えんやにつづく(*´艸`)

特集：卒業

前向きに振り返る青春の1ページ

阿久津 崇（筑波大学 生物学類 4年）

「あの時どうしてこれを・・・」「あの時こうしていたら今頃はもっと・・・」、後悔は誰しもがすることだと思います。一度考え出すと終わりが来ないので大変です。

僕は4年生になると同時につくばを離れ、静岡県下田市へとやってきました。もちろん、筑波大学下田臨海実験センターで卒業研究を行うのが目的です。実際に僕がつくばで過ごしたのは入学してから3年生の三学期までの3年間でした。今でも入学したころのことははっきりと覚えています。1人暮らしを始め、新しい場所、新しい学校、初めて会う人々、部屋に帰っても誰もいないし、食べるものもない。環境がガラリと変わりました。そしてこれは友人たちにもあまり言っていないことなのですが、僕にはひとつ特技があります。それは人の顔と名前を覚えることです。入学当初、若干の人見知りである僕は、たとえ知っている人に会ったとしても、知らないふりをしていました。恥ずかしかったのかもしれませんが、今思えばちょっと格好つけていたのかもしれませんが、今考えてみても、新しく人に出会い、話すということがとても意味のあることだったと思います。本当に惜しいことをしました。後悔しています。

2年生になると授業はより専門的になり、面白くなってきました。僕は成績があまり良くはなかったのですが、実験や実習が始まり、この頃は楽しかった思い出しかありません。

そして3年生も後半となり、卒研で所属する研究室を決めることになりました。同級生たちは既にあちこちの研究室を訪問し始めました。この頃、とても迷っていました。僕は2年生の夏に生態学臨海実習で下田臨海実験センターに来たことがありましたが、まさか下田で卒研をすることになるとは思いもしませんでした。でも、なんだかんだで下田臨海実験センターの海洋生態学研究室を選びました。生態学をやりたいかったというのがもちろん一番の理由ですが、僕は海のないところの出身なので、海の近くに対する憧れみたいなものも少なくともあったような気がします。今思えば、何か縁があったのかもしれませんが。

海が近いというのはとても魅力的ですが、下田はつくばのように人がたくさんいるような場所ではありません。それなら研究室のメンバー以外との交流なんてなく、閉鎖的な環境なのでは？と思われるかもしれませんが、それは違います。下田臨海実験センターには筑波大学はもちろん、他大学の研究者や大学院生たちが調査・研究のために頻りに訪れています。そういった方々の研究や過去についての話を聞くことが僕は好きです。また、自然観察会などを行う団体もあり、行事に参加するとまた新たな発見があります。学生だけでなく、社会人との関わりが増えました。それでも、東京やつくばなど、人の数が絶対的に多いところにはかないませんが、色々な人の話を聞くチャンスには恵まれていると思います。

この文章を書いている今、1月の下旬です。あと2ヶ月弱で卒

業です。大学生としての4年間は無駄ではありませんでした。多くの人と出会い、色々な考えを聞くことができたことは後々絶対に生きてくると思います。こうして色々な人の話を聞き、吸収するチャンスというのはどんな時や場所において発生するものなのか分かりません。これから先、気づかずにチャンスを逃すということだけは絶対にしたくないです。大学は卒業しますが、常に自分がおもしろいと感じることを日常生活の中で常に見つけ続けていけたらいいなと思っています。



特集：卒業

地道であるということ

阿久津 翠（筑波大学 生物学類 4年）

私が勝手に思っているだけかもしれないが、高校生が大学を選ぶ際に参考とする情報は、酷く偏っているように思える。そもそも、高校生の時点では『大学に入って何を学ぶか』より『大学に入れるか』の方が切実な問題であった。もちろん、高校の教師はそれではいけないと言う。大学に入り、何を学び、どんな人間になりたいのか。それをしっかり見定めて大学を選べと言う。…たかだか18歳でそんな事が出来るわけ無いだろう、と言うのが今の私の素直な考えである。高校の諸先生方のこれらの言葉に嘘は無いと信じているが、やはり『無事に大学に進学してほしい』『なるべく浪人はしないでほしい』という思いは暗に伝わってきていた。私が諸先生の立場であってもそう思うだろう。高校の進学実績云々も、潔癖な人は嫌うかもしれないが私は一つの立派な理由であると思う。

それが全ての原因とは思わないが、私が大学を選び、学類を決めた時、そこに確かな情報は無かった。この大学では生物学のここが学べる、この分野に特化している……などという情報は手に入れようとも思わず、とにかく『生物学』がやれるならという理由だけだった。筑波大学の生物学に関する情報は無く、そもそも私自身の『生物学』への認識も随分お粗末なものだった。現実離れしていたとも言える。正直に、そして簡潔に言えば当時の私は生物学を『良く分からないけどカッコいいもの』だと思っていた。ES細胞など報道されるような最先端の技術や研究は、私にとって『カッコいい』ものだった。その憧れがあまりに強かったのか、私にとっての生物学はSF映画のような、最先端技術を駆使する学問だと思っていた。

大学生になってから理想と現実のギャップを感じるかと言うアンケート結果を見た事がある。そして、回答結果は『はい』が80%を超えていた。理由は様々だろうが、私もそうだった。勝手な理想を抱いたのはこちらなのに、現実に対して文句を言うのもどうかと思うが、それでも『こんなはずではなかった』とってしまった。大学の講義は確かに面白いのだが、私の勝手な理想よりずっと地味だったのだ。地味な実験の繰り返しと、地味な結果の検証。それを何度も何度も繰り返して、結論を組み立てて行く。その作業も地味だ。それが一番大切だというのに気が付いたのは、卒研も半ばの4年生9月頃だったと思う。

私の卒研のテーマは、さび菌の分類である。さび菌の塩基配列解析は他の分野に比べればまだまだ進んでいない。そのため、形態による分類も合わせて、系統解析も行う事になった。M2の先輩から手ほどきを頂き、DNA抽出からシーケンス解析、系統樹解析と行っていったが、やはり理想に比べて地味だった。実験の結果の良さも、たとえばピペットの扱いであるとか、ミックスの際の微妙な加減であるとか、まさに経験で補っていく部分が多かった。『致命的ミス』ではなく、本当に些細なミスで、結果は変わる。そういったことを理解するのに随分時間を掛けたような記

憶がある。形態観察に至っては、顕微鏡をのぞき、胞子の長さを計測し、記録し、また測る。その繰り返しで地味な作業だった。

しかしそれが生物学で最も大切なことであると思う。一見地道で見栄えのしない作業こそ、研究で一番大切にしなければならぬことのような気がする。派手な結果や、すぐに社会貢献できる研究も素晴らしいし、未だにそれに対する憧れはある。けれどそういう『派手な研究結果』を陰で支えているのは、多くの諸先輩方、諸先生方の地道で堅実な努力であると思う。そしてそうして得た結果を正しく考察し、正しく人に伝えなければいけない。どんなに地道な作業に徹し大量のデータを手に入れた所で、正しく整理しなければ意味が無い。どんなに素晴らしい考察をしたところで、伝わりにくいならこれも意味が無い。

大学で一番何を学んだかと言われれば、今の私は『堅実な作業の大切さ』だと答える。一時の注目や派手さに囚われず、きちんと道筋を立てて一つのことに取り組む。そう言った積み重ねが一番大切なのではないかと思う。とは言え、学ぶものはまだまだ山のようにあるのだが。

特集：卒業

4年間を振り返って

浅井 庸子（筑波大学 生物学類 4年）

高校3年生の11月、初めて筑波を訪れた私は紅葉真っ盛りのキャンパスに惚れて筑波大学の受験を決めました。

両親を説得して一人暮らしを承諾してもらったものの、一の矢寮に入寮した当初は部屋があまりにも殺伐としていたり、洗濯機の中から猫が出てきたりと衝撃だらけですぐに挫けそうになりました。それまでは自分は絶対ホームシックなんかにはならないと思っていたのですが、4月の筑波おろしに凍えそうになりながら、こんなところに来るのではなかったと心底思いました。

そんななか転機がやってきました。やどかり祭での神輿製作です。元々美術部に所属していたこともあってすぐに参加を決めました。生物学類のほぼ全員が、授業が終わってから毎日のように平砂寮で夜遅くまで神輿を製作した甲斐あってとても満足が多く、迫力ある作品になりました。また、神輿の製作に参加したことで同じ学類の人達とも仲良くなれ、ようやく筑波での生活に余裕が出てきました。本当に参加してよかったです。

1年生の時は文化祭で出店した「おでん」でポスター製作をやらせてもらったり、宝鏡山まで自転車で行って登山をしたり、と活動的に過ごした気がします。

2年生の文化祭では「やきとり王子」のTシャツをデザインさせてもらいました。2年生で一番印象に残っているのは柳沢研でのアルバイトです。文化祭も終わって私もそろそろ真剣にアルバイトを探そうかな、と思った矢先に偶然にも研究室でのアルバイトの話が舞い込んできました。私の苦手な動物を相手にしたアルバイトでしたが、おかげで少し動物にも慣れて、研究室の雰囲気などを知ることができました。1年間という短い期間でしたが、とても親切にいただきました。

3年生の冬には研究室も決まり、念願だったアパートに移りました。

4年生になって研究室に行くようになってからは時間が過ぎるのがとても速かったような気がします。考えて手を動かすというのは、授業を聞いてテストを受けるのと違って私にはとても高度なことで最初は戸惑いましたが、最近ようやく研究への取り組み方がわかってきました。私はこのまま院へ進学するので、さらに研究に対して熱意を持って取り組んでいけるといいな、と思います。

最後に、生物学類の皆さまありがとうございました。

特集：卒業

偶然と必然

安達 大輝（筑波大学 生物学類 4年）

はじめに

昔から人々が問い続けてきた問題の中に「私たちはなぜここにいるのか」という問いがある。例えば、唯一神が最優秀のプランに基づいてヒトを創造したと考える場合の答えは「Only God knows」、進化の偶然性に重きを置く場合は「偶然である」、そして絶対論者¹の答えは「必然である」。

神の存在を全否定することは誰にもできない。それは「神が存在しない」証拠を提示することが不可能である、ということが大前提にあるからである。米ードル札の「IN GOD WE TRUST」という言葉は、この前提を基に成り立っており、この前提の正否には議論の余地がない。そこで、ここでは先に挙げた後者2つの答え—「偶然である」、「必然である」—について考えていく。

偶然性

なぜ特定の男女は惹かれあうのだろうか。現在のヒト社会における形質の優劣や淘汰は実に曖昧である。外見は申し分なくとも性格が最悪であれば元も子もない。金や地位がものをいう時だつてある。恋愛遺伝子とも言われるMHC（主要組織適合遺伝子複合体; major histocompatibility complex）の不一致が男女を結びつけるという説²もあるが、全ての事象で成立するわけではない。もしこれが本当だとしてもただの一つのfactorにすぎないだろう。こういった考えの基、今一度先ほどの問いに向き合うと「特定の男女が惹かれあうのは偶然である」という回答に達してもなんら不思議はない。

必然性

一方、必然性は「運命」や「赤い糸」に置き換わることにより、より非科学的に、そして幻想的に認識されがちである。不思議なことに一塵の根拠もないのに、妙な説得力がそれらの言葉に付随してくるのはなかなか興味深い。当然であるが、自らの一挙一動をこの「絶対的な力」に逆らって制御しようと試みても、必ず失敗に終わることだろう。有限なるヒトが行うその一連の思考も運命であるのだから仕方がない。

この抽象概念を追い求めようとする探究心こそが、歴史の中で宗教を生み、学問を生み、そして科学を生んだ。さらに、「力」ではなく「存在」としてヒトが到底達することのできない領域を示すものが「神」であり、intelligent design theory³における「知的創造者」である。

偶然か必然か

未来に起こりうる事象に関して言えば、「偶然」とは、ただ現在の科学で「予測不可能」なだけなのかもしれない。つまり、その事象を構成している全てのparametersを把握できてこそ、そこに必然性を見出すことが可能となる。この考えに従事すると、

科学の進歩と共に偶然が必然へと置き換わっていくように思える。

ただ、全ての事象が必然となるpotentialを有するかどうかは分からない。これを証明するためにはその事象に関わるparameters全てを的確に考慮する必要がある。「私たちがここにいるのは偶然か、必然か」という問いに関して言えば、「全て」とは人類の始まりまで、いや、究極的にはこの世の始まりまで—「initial」まで—遡り、考慮することを意味する。そうして得られた結果には紛れもない真実があるはずであり、そこまでして初めて、偶然性、または必然性が証明されたことになる。

しかし、残念なことに現在の科学では、多くの場合、ヒトの理解の及ぶ範囲内にその証明は存在しない。そして、論理的に考えて「偶然」という言葉を発した者は自らの無知や無力を公にしており、「必然」という言葉を発した者は待ち受ける懐疑論の猛襲に対しなす術を持たない。

私たちはヒトとしての理解の限界を超えることができない。このことはネズミを捕まえることが許されるのか、ネコに尋ねてみれば分かるはずである⁴。しかし、確かにヒトの理解や倫理観に左右されない法則がこの世には存在する。

偶然性や必然性が証明され、偶然や必然という言葉に絶対的な説得力が伴うまで、科学は終わらないだろう。もしも将来、その証明の一片を垣間見ることができるときに、人々は科学の終わりが近いことを悲しむのか、それとも科学の揺るぎない進歩を喜ぶのか。または、その片鱗も拝むことなくヒトの歴史は終わるのか。私には想像もつかない。

References

- (One scientific paper², academic book³ and two novels^{1,4})
1. Fewer, Adam. *Improbable* (HarperTorch, New York, 2006).
 2. Wedekind *et al.* MHC-dependent mate preferences in humans. *Biological Sciences*. **260**, 245-249 (1995).
 3. Dembski, William A. *Intelligent design: the bridge between science & theology* (InterVarsity Press, Illinois, 2002).
 4. Schätzing, Frank. *The Swarm* (German: *Der Schwarm*) (ReganBooks, New York, 2006).

特集：卒業

イグチの奇妙な大学生活

井口 悠也（筑波大学 生物学類 4年）

男A「今から起こったことをありのままに話さず。俺は4年間勉強に没頭しようと努めていたつもりだったが、気付いたら辛いことや♪なことをしていた。何を言っているのか分からないと思うが俺も何をしていたのか分からなかった。卒業単位未取得とか研究データ消滅とかそんなちやちやもんじゃねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

男B「ああ、ほんとに何を言っているのか分からない。」

男A「つまり、大学とは自分の意思に反してまったく異なることをしてしまうところということだ。」

男B「そんな馬鹿な…」

男A「その証拠に、今の俺は大学校内にいたときの記憶がほとんど残っていない。」

男B「それは単に記憶力がないだけ

バキッ！！！！

男B「なっ！何をするだァー————ッ、ゆるさんッ！」

男A「まあ落ち着け。そのようなことは重要ではないのだ。今思えば、この4年間短いようで実は色々なことをしてきたということが言いたいだけだ。」

男B「確か、初めて見た同学類生は下駄を履いていたな。」

男A「さすがディ●！おれたちにはできない事を平然とやっけるッ。そこにシビれる！あこがれるウ！…ことはなかったが、世界の広さを知った気がした。」

男B「みこし作りは、話をするいい機会だったな。」

男A「お前は自転車でみんなを置いて走り去っていったと反感を買っていた気がするが…まあ良しとしよう。」

男B「あれがきっかけで色々なところで色々な関係がどうのこうのなっただけだが、当時の俺の耳に入るよしもなし…」

男A「みこし作りと平行して朝にはサッカーやフットサルもやっていたが、あれは生態学概論の小テストに悪影響だった…。おかげで単位は次の年にお預けだッ！」

男B「そういえば、一年の一学期が最も単位を落とした時期だったな。しかも、何やら不審なサークルに引っかかってなかったか？」

男A「夏休み中、実家に大学の生活科から直接電話がかかってきたときには驚愕だった。」

男B「まあ、なんとなく怪しい節はあったが、まさか本当に存在しているなんて思わないよなあ」

男A「いや、それもあるが、大学サイドがこの情報をどうやって入手したのかが気がかりだ…。おそらく内部に内通者が…」

男B「大学入りたてにしていきなり人間不信になりかけるなん

て、災難だったな。なあ、Y. I.のだんな」

男A「まったくだ。だが、悪いことばかりでもなかったな。」

男B「というと？」

男A「少しずつではあったが、親しい友が増えていった。自分のキャラクターが少しずつ周りに認識されていったからだろう。」

男B「第一印象と性格があっていないからな。」

男A「きっかけはル●ン・ザ・ファイアーだろうか？」

男B「…きっと他にも気づいていないことがあると思うぞ」

男A「呼ばれたイベントには欠かさず顔を出すとか？」

男B「3クラのくせに4クラのイベントにいたのは、一体なんだったんだろう？当時としてはとてつもなくアウェイだったろうに…」

男A「まあ、呼んでもらえるのは有難い事だ。」

男B「…思い返せば色々あったな。」

男A「自分は参加しないのに筑波レガッタの応援をするために土浦までチャリをとばしたり、」

男B「そのついでに焼き芋やったり、」

男A「ライサンが来たり、」

男B「徹夜明けの日曜日に自転車で東京まで行ってしまったり」

男A「その帰りにタイヤがパンクしたり、」

男B「大人数でバス貸し切ってスキーに行ったり、」

男A「成人飲みで悪夢を見たり、」

男B「オールバックと騒ぎ立てられたり、」

男A「学生実験で、昼から深夜2時まで実験し続けたり、」

男B「イケメン監視員なんて妙な異名をつけられたり、」

男A「そのプールのバイトが暇すぎて思わずラブを覚えてしまったり、」

男B「誕生日会でチョコレートケーキを半円分ほど食うことになってしまったり、」

男A「山登りのために下見しに行っ、」

男B「ついでにリンリンロードで霞ヶ浦まで行って、帰りに風が強くて辛かったり、」

男A「次の日にまた同じ山に登ったり、」

男B「あまりに暇すぎて本格的にガンブラを作ってしまったり」

男A「頭部を残して飽きてしまったり、」

男B「4年は適度に力を抜きながら実験をしたり、」

男A「そんな4年間だったな。」

男B「そうだな。では、そろそろ時間だ。ということで…」

男A&B「おれは大学を卒業するぞ！●●●●———ッ！！」

特集：卒業

アングラなるもののススメ

石松 純（筑波大学 生物学類 4年）

アングラとはアンダーグラウンドの略である。世間的にマイナーで、面白みが分かりにくく、閑古鳥のねぐらとなっているような様々なモノを指している。自分は生物学類で学ぶ一方で、そんなスポーツや活動と関わった。卒業研究は発表でまとめさせていただいたし、ここではなぜかアングラな活動に参加することをお節介にもオススメしようと思う。

大学生活というのは非常に暇で、卒業するだけなら1年間まるまる授業をとらなくても何とかなる。そこで向学心あふれる連中は他の授業を取ったり、Aを目指したりして努力をするわけだが、そんなものに時間を費やすのは実にもったいない。早期に研究を始めたりするのも考え物だ。自分探しの旅などもっと無意味だ。それらは自分自身で完結させられ、しかも成功が保証されているからだ。

どうせ暇ならアングラなモノに手を染めて欲しい。そこにはアングラたらしめる様々な問題や課題があり、解決法など分からない。そこで何かをしようとすればそれらはがんにがらめに絡み合っただけでままたまならない。未来への明るい展望などあるはずもなく、現状維持が精一杯。そんな陰鬱な世界の何が楽しいのかといわれるかもしれないが、そこにいる人々は無力であっても恐ろしく精神的だ。なぜならそのモノが本当に好きな人間しか残っていないからだ。そんな人々と一緒に、世界の片隅で忘れ去られるコミュニティの存続に躍起になることは、得がたい経験を与えてくれる。

ほとんどの学生は恵まれていて、頭がよく、そして些か自惚れが強い。だからこそ、失敗を怖れるし、失敗が約束された事には手を出さない。そして、メジャーなモノで無難に名を上げ、自らのスキルを上げる事を好む。だが、「君子危うきに近寄らず」のスタンスはそれが通用する範囲に人生を限局させてしまう。今後見ず知らずの環境に投げ込まれた時、困った事になるだろう。そうならない為にも、危険なアングラに手を染める事をオススメする。

無論、自分が本当に今のめりこんでいる事があるならそれに集中すべきだし、充実しているのにやめてまで始める必要はまったくないのだが、マイナーなもの、かっこ良くない物を敬遠してやらないのはまったく損な事だ。そういう人間はあえてアングラなるモノに参加するべきだ。

アングラな世界では、いままでやったことのない事をこなす技能を求められる。なにせ人数が少ないものだから、ひとりひとりに求められる負担も大きい。一方で妥協しなければ無限に仕事は増えていき、自分の限界を超えてしまう。狡賢さも必要だし金との折り合いも付けなくちゃいけない。おまけに成功するか分からない上に、諸手を上げての成功なんか稀だ。はっきり言って苦勞ばかりで、失敗すれば叩かれる。

それでもやりがいがあるのは、一人一人の存在が大きく、個人を認めてもらえる場がアングラな世界にはあるからだ。これはメジャーのモノにはない特色で、くるくると自分の意見でおおいに変化してくれる。もちろん、自分も今まで知らなかったような人間の意見を聞き、計画を変える柔軟性を持つ必要もある。

もうひとつは、未来への希望だ。今は四苦八苦していても、いつかはきっとメジャーなブームに繋がるという淡い希望だ。もともと自分が関わっているうちに叶う事はほとんど無い。自分は今も10年も願っている。

環境保護団体、福祉団体、マイナースポーツ、バンド、地域団体など、この世にはアングラが溢れかえっていて、生まれたり消えたりを繰り返している。人口が減っているせいか、それとも社会の変化か、メジャーなものばかり持て囃され、最近レッドデータブックに載せたほうがいくらかのアングラが増えている。こういうものはいつでも学生のような暇人を求めているし、学生にとっても刺激的な場であることに変わりない。

だからこれから院生の人間も、学生の人間もアングラなるモノに関わってはいかがだろうか。

以上

2010年の流行語をアングラにしたい 石松

特集：卒業

D I V E !!! 山(*`▽´山)

市川 愛 (筑波大学 生物学類 4年)

筑波大学合格、入学

1年 駿台

ユカコン

スポデー

富士山頂上

2年 L.A. 3週間

GF

REAL JAM, jeweL

RICHOCKET, fashion show

3年 成人

草津ぶらり一人旅

THAI タマサート大学

A common beat 100人100日ミュージカル

4年 v

IBO



いやー…こう見ると、ほんつとになんでもしたなww

海外もめっちゃんこ行った。

リベンジだったLA、飛び込みのタイ。

濃い時間だった。タイなんて笑いすぎて死にそうだったもんw

思い返すと、長いようでバタバタ走り抜けた4年間だったなあ。。

いろんなことを経験して、すーごくたくさんの出会いをして。

たくさん想って、たくさんくじけたw

年上も、年下も、もちろんタメもたくさん出会って。

なんか、ひとつひとつあたし毎回後悔しちゃうんだけどw

でも、ちゃんと思い返すといろんな人が近くで笑ってくれたんだなあ、とか。



いつまでたってもあたしは

keep in touch

ていうのが苦手でしょうがなくて。

ちょこっとした関係をいくつもつなげたけど

その中で、何人かおそろしく魅かれる人もいて。

まー…まったく連絡取らないくせに急に発作的に声が聞きたくなる人がいて。

だから、それはそれでいいんじゃないかなと思う。

…つなげられるのが一番なんだけどw

がまんできなくなって、あたしが急に連絡してきたら、相手してやってね。

大学4年間、あたしのホーム、駿台柏校だったなあ。

結局、中学1年から、10年もいてしまった。。

あたしが一番あたしでいれるところで

元気をもらえるところで

なにより、仕事仲間

特に同期は一人残らず一生離したくない人たちで。

たくさんのことを教えてもらった仕事でした。

柏はやっぱり遠くて高かったけども

駿台無くして市川なしっ

それからやっぱり中高の友達はそのまーんまで

距離がすごい離れても

あたしの頭が離さなくて

見た目もかっこも変わってても

なんだかんだホッとするもんね。

こればかりは変わらないんだろうなあ。

そのうち日本から消えちゃう人もいるけど

きっとまた急に会いたくなって

会っちゃうんだろうな。



つくばは…

気がゆるせない、でも甘えたい場所だったのかな。

ん。まだわかんないw あと2年もあるから。。

でもきっと数年後にはつくばがなつかしくなる。

はりえんじゅ、へびいちご、なつつばき。

生物のみんなとはいちごがり、海とか、山とか、お酒とかw

そーゆー「大学生っぽい」遊びも

ほんつとにアホみたいなこと叫びながらw

すっごいたのしかった。

だから！

これからもたのしーことたくさんしよーね☆

わたし、まだ足りないや ←

実感するのってすごくむつかしいけど

たのしい、たくさんそばで笑ってもらった4年間だった！

ありがと。で、よろしくね！

あと2年のつくばも、それから先も。

わたしは、

DIVE!!!!!!

続けますかね☆キラッ☆

さーて、それじゃ。 えんやにつづく\(`▽´)/

特集：卒業

割と真面目に書いてしまった。

稲村 拓也（筑波大学 生物学類 ギリギリで4年）

卒業文集つっても何を書けば良いのか？色々考えてみたが未だにじっくり来ない2月4日の夜。そういえば自分の高校時代から続くあだ名の由来について、ほとんど話したことがないなあと思ったので、とりあえずそれについて書いてみた。

俺は身近な人にランディと呼ばれている。まあ、この呼び方は使わない人もいっぱいいるケド。この呼び方は大学で名付けられたものではない。今から7年前、高校2年のときに使われ始めたものである。うちの高校でもほかの高校と同じように文化祭があり、当時の俺はその責任者に任命されていた。ある日企画の話し合いを行っているとき、とある男子が突然こんな提案をしてきた。「俺、トロッコ作りてえ！」あいつ何意味わかんねえことをほざいてるんだって感じで普通ならすぐに却下されるんだろうけど、何故かうちのクラスは妙に乗り気だった。さらにほかの男子が「トロッコって、インディ・ジョーンズじゃね？」「ホントだ、インディ・ジョーンズの冒険じゃん。」何故かインディに異様にのっかってくる。大体お前らインディの話なんかしたこと無いだろうかと、今文章にしてみても初めて突っ込んでしまった。当時の俺はまるで冷静じゃなかったようである。こうして、うちのクラスはトロッコで冒険的なことをやることになった。十代のノリは怖いものだなと思う。

その日の帰り道。友達何人かと文化祭のトロッコについて盛り上がりながら駅に向かっていったとき、何の前触れもなく友達がこう発言した。「インディ・ジョーンズ、インディ・ジョーンズ……。イナムランディ・ジョーンズ!？」この発言に周りにいた友達が飢えた鯉のごとく食いついてきた。「イナムランディ……。縮めてランディじゃね？」その帰り道はそんなこんなで盛り上がりながら帰って行った。しかし、完全にその場のノリで盛り上がりただけなのでこのあだ名が定着するとは、この時思ってもいなかった。

俺の予想は全く当てにならない。この何となくノリで決まったあだ名にクラス中が反応してしまった。うちのクラスは俺を含め皆アホばっかであったため、定着したんだろうなあと思っている。

これがあだ名の由来である。よく「なんでランディなんですか？」と聞かれるが、由来を今まで話さなかったのはオチのないつまらない話をしなければいけなかったからである。高校時代の話はほかにもっと面白いエピソードがあるので、あえて話さないようにしていた。卒業でお別れの人も多いため今回は書いてみることにしたけど、正直ほかにもネタが無かったというのが一番の理由だ。

この文章を書いていて思ったことは世の中には知らないほうが良いことがたくさんあるということである。掘ってもろくなもんが出てこないって結構あるもんだ。それにしても、このエピソード

は文章にするとつまらなさが一層際立っている。自分で想像してたのよりはるかにつまらない話になっていて、逆に笑える。

前置きが長くなってしまったが、大学生活の4年間を振り返ってみるとかなり忘れてしまっているため、正直言って文章化がほとんど出来ない。けれど、まあ楽しかったんじゃないかと思う。友達もそこそこ出来たし、くだらない事に果敢にチャレンジ出来たから概ね満足している。色々自由にやってたので、迷惑かけた人も多いかもしれないけど、そういうのも含めて思い出なんだろう。

ただ、もしもう一度大学生活がやり直せるなら、もっと違うあだ名で呼ばれてみたいなど割と本気で思っている。まあやり直せないから楽しいんだけどさ。



特集：卒業

無題 (Japanese/English)

宇田 静葉 (筑波大学 生物学類 4年)

Event

Comment

- 2005年12月 筑波大学第二学群生物学類一般推薦合格発表
- 2006年3月 私立茨城高等学校卒業
- 2006年4月 筑波大学第二学群生物学類入学
教養、概論、教職



- 2007年4月 2年次
講義、実験、教職

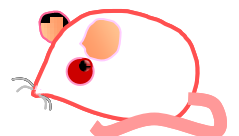
- 2008年4月 3年次
講義、実験、教職、人間生物学
生物学演習

- 2009年4月 4年次
卒業研究、大学院入試、卒業



合格通知を手に入れた。受験から開放。のはほんと過ごす。
 恩師の先生ありがとうございました。
 一の矢宿舎に入居。キャンパスライフ(予定)を大幅に方向修正。
 2クラになった。(*・ω・*)
 逃げ切ったはずの物理、化学と再会。英語がBクラになる。
 外国語センターのカセットテープに昭和を感じる。
 概論と基礎生実験を履修。とりあえず教職科目も履修。
 部屋に冷蔵庫を装備した。
 やどかり際で野菜を刻む。
 3学期は物理・化学と教職の授業ばかりで辛くなる。
 講座でTOEICを受ける。英語に向かない。
 筑波英検に受かる。
 部屋にハロゲンヒーターを装備した。車を手に入れた。
 57単位を手に入れた。
 2年次2年になった。
 介護等体験をする。アパート民になった。
 下田実習：ヤドカリを殻から出す方法「THM法」を開発☆
 電顕実験：天の川でオタマジャクシを捕獲(*^v^*)
 65.5単位を手に入れた。
 3年次3年になった。
 発生学実験：生命の神秘を感じる。某父娘の訪問談が微笑ましい。
 下田実習：海はまだ寒かった。ウニとウミホタルに興じる。
 菅平実習：雪と動物にはしゃぐ。クマの足跡?がみつき騒ぎになる。
 友人と男子学生喫茶へ行ってみる。価値観の多様化を感じる。
 42単位を手に入れた。教職科目を取り終えた。
 卒研の共同研究で横浜理研へ出張。講師の先生と1時間半の旅。
 4年次4年になった。
 卒研と戦う。
 TOEICを受ける。スコアが悪い。。。
 母校で教育実習。再び恩師の先生にお世話になる。
 筑波大学院入試を受ける。受かる。
 卒研と戦う。
 22歳になる。
 教員免許一括申請と戦う。
 卒研発表準備。マウスの画にこだわる。

お世話になった皆様
 ありがとうございました



特集：卒業

生物学類に入学して

塩谷 天（筑波大学 生物学類 4年）

月日が経つのは早いもので、2006年の4月に筑波大学へ入学してからもう4年の月日が流れました。卒業に向けての文集ということで、現在キーボードを叩いている訳ですが、こういった文章を書くのはなかなか慣れないものです。完全に自己満の駄文ですが、もし読んでいる方がいられましたら最後までお付き合い頂けたらうれしく思います。

4年前の3月、後期試験の合格発表を高校時代にお世話になった生物の先生とインターネットで確認したとき、高校の職員室と一緒に大声で叫んだのは今でも記憶に残っています。模試の判定は最悪で、センター試験も中途半端な結果でしたが、生物学を学びたく、何としても第一志望の筑波大に入りたいという思いから、合格したときの当時の喜びは相当のものでした。今になって書きますが、筑波大を第一志望にしたのは中学時代に1番仲の良かった友達が「筑波大に行って生物を学びたい」と言っていたからというなんとも不順な動機でした(笑)。当時その友達とはよく一緒に昆虫採集に行ったりして遊んでいました。昔から生物が好きでよく生物図鑑を眺めたり、昆虫採集に行ったりしていましたが、まさか筑波大に来て生物学を学ぶことになるとはそのときは夢にも思っていませんでした。ちなみにその友達は高校から別れて、都内の私立大に入学していきました(笑)。

そんな思い出もあったりして、合格してから1ヵ月後の2006年4月、晴れて筑波大学生物学類生としてつくばに来た訳ですが、つくばでの生活は高校までのそれとはとてもかけ離れたものでした。初めての一人暮らし、今までとは違う高度な内容の大学の授業・実験、毎週課されるレポートの山。生物学を学びたく生物学類に入学しましたが、大学入学前まで思っていた理想と現実とのギャップやこれまで経験の無い一人暮らしで最初は戸惑いや不安が多々ありました。しかしそんな中でも、先輩や同期の友達の助けを借りながらの学生生活は毎日が充実していました。もちろん苦しいことだけじゃなく、新歓、飲み会、やど祭、旅行、免許合宿、学祭にと1年生のうちで楽しかった思い出はたくさんあります。

つくばでの一人暮らしも慣れてくる頃、気付いたら2年生になり、新しく入学してきた後輩たちへの新歓イベントのお手伝い。授業・実験もより専門的になり1年生とはまた違った生活スタイルに。それとこのころから学類のイベントや行事に積極的に参加するようになった気がします。新歓イベントしかり、夏の大学説明会、サマーサイエンスキャンプ、つくば科学フェスティバル、サイエンスキッズなどなど。今になって思い返せばいろいろなところに首を突っ込んだなあと思います(笑)。そういったイベントで多くの先生や先輩・後輩と知り合えたのは筑波大の生物学類に来てよかったと思えることのひとつです。

そんなこともあってか、3年生・4年生になってからもいろいろと声をかけていただき、大学説明会や科学フェスなどの学類の行事には続けて参加しました。中でもやっぱり一番大きかったイベントは2009年の国際生物学オリンピックでした。規模としては国を挙げたイベントでしたから事前の準備も2年前から行なわれていました。僕はイベントのサマーキャンプ2007、日本選手の選考会の生物チャレンジ2008にスタッフとして参加していたので、2009年のオリンピック本番も合わせて3年近くオリンピック関連のイベントでお手伝いをしていました。オリンピックについて詳しくはオリンピック特集号で少ししゃべっているので、ここでは詳しくは省略。本番中はずっと大変な1週間でしたが、他国の高校生や先生たちと交流するという事は、他国の人たちの文化を知るという意味でとても良い経験になりました(自分の英語の出来なさを痛感させられるという意味でも…)

オリンピックが終わってからは卒研に大学院入試にとあつという間に時間が過ぎ去り、気付いたら卒研も追い込みになりかかっています。この文集を手取るころには発表も終わりひと段落ついているころだと思います。きちんと発表を終えられたことを願っています。

つらつらとこの4年間を振り返った文章を書かせていただきました。昔の思い出を振り返っていると、楽しかった思い出もあれば思い通りにいかなかったこともあり、あのときこうしていれば良かったのに!とか、あのときもっと頑張れたはず!といった場面もありましたが、そんな思い出すべてをひっくり返しても筑波大での学生生活はともて充実した4年間でした。

4月からも大学院生としてつくばの地に残りますので、同じく進学する方はこれからまた2年間(もしかしたら5年?)よろしくお願ひします。つくばを離れる人はまたそのうちのどこかでお会いしましょう。

最後にこの文集を書く機会を与えてくださった卒研発表委員会の石川翔一君をはじめ、つくば生物ジャーナルの丸尾先生および編集者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

それでは皆様、またどこかで。

ps.続けた人へ

みんな何書いてるかわからんし!

とりあえず10年、20年経っても忘れないでねw

特集：卒業

TJB 学生編集部の思い出

紙谷 幸子（筑波大学 生物学類 4年）

つくば生物ジャーナル (Tsukuba Journal of Biology)、略称 TJB。もしかすると学類生の多くは「卒研の要旨とかシラバスが載っている冊子でしょ？」くらいにしか認識していないかも知れません。しかし実際は学類生や教職員、OBの方や退職された先生など、さまざまな人が記事を投稿し意見交換できるオンラインジャーナル、なのです。私は2年生の6月に、生物学類の掲示板に貼ってあったTJBのポスターを見かけてから、TJB学生編集部の一人として活動してきました。4年生になってからは現1、2年生に任せるようになったので、3年生の3月までの実質2年足らずの活動でしたが、その活動での思い出などを書いてみたいと思います。

2年生の頃、私は生物学の先端に行く専門家といわゆる一般人(つまり生物学については中学校かあるいは高校で勉強したきりで、普段意識なんかせずに暮らしている人)との橋渡しをするようなことがしたいと漠然とっていました。生物学のさまざまな興味深い話を噛み砕いて広く一般に伝えることができたらとても楽しいのではないかと、将来的にはそれを仕事にできたらとても素敵だ…と考えていたのです。今では高校の先生になって、高校生にいろいろな興味深い話をしたいと考えていますが、ポスターを見かけたときに「そうだ、科学ライターも素敵だ」と思ったのです。そこで学生編集部に入ることにしました。

最初に取り組んだ企画は「研究室訪問」でした。当時稲垣祐司准教授が文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞されたので、受賞した研究や研究に対する姿勢などをインタビューしたのです。私は受賞した研究についての解説記事を担当したのですが、研究内容を間違いの無いよう正確に、それでいて簡潔で分かりやすく説明することに随分苦労して、完成するまでに時間がかかってしまったことを覚えています。しかし何度も表現を練り、音読しては直して作った記事が完成したときの達成感もまたとてもよく覚えています。

3年生になる頃には、同級生の新行内くんと白戸くんが新たに学生編集部員に加わり、先輩方が卒業研究で忙しくなったこともあり、同級生の3人で話し合っただけで企画を進めるようになりました。新行内くんも白戸くんも非常にアイデアマンで、かつ独特の軽妙なトークを得意とする人たちなので、私はミーティングの度に彼らの考えた企画に感心したり、彼らの話に笑い転げたりと大変楽しく過ごしていました。

この頃から、TJBに載せるための記事作成と並行して、バイオeカフェの記録記事作成を手伝うようになりました。バイオeカフェは生物学類生などがスタッフとなって運営しているサイエンスカフェです。もともとはバイオeカフェのスタッフが毎回の記録記事を作り、TJB学生編集部で校正をしていましたが、その頃はちょうどバイオeカフェスタッフが多く入れ替わったこともあり、記録記事を作るところから引き受けることにしたの

です。サイエンスカフェの理念というのは「科学者と一般市民がリラックスした環境で科学について話しあう」というものですが、私がもともと漠然と考えていた「専門家と一般の人の橋渡しができたらとても素敵ではないだろうか」ということによく当てはまります。ですから、そのバイオeカフェの内容を記録記事として文章で再構成するということはとても楽しく、やりがいのある活動でした。もちろん、スピーカーの方が話したり、話を聞きに来た人とやりとりをしたりする間ずっと、必死にメモを取るのとはなかなかに大変ではありましたが…。

3年生の3月におこなった、退官される先生へのインタビューを最後に、現2年生のメンバーにお任せするようになりました。元気でアイデアマンなので面白い企画を考えてくれると期待しています。また同級生の皆さんには、オンラインジャーナルの「パソコンがあればいつでもどこでも読める」という長所を活かして、今後もTJBの記事を読んで、あるいはOBとして記事を投稿して、盛り上げていただければと思います。

特集：卒業

人生の夏休み

菊地 デイル 万次郎 (筑波大学 生物学類 4年)

一年の夏休み
北海道宗谷岬への旅



生物学類カレッジ野球チーム



うほっ！



チャリで筑波山神社に行ってきた！
実験中ですが何か？



下田の実習 バカ騒ぎ
夜のトークも下だった
思ちゃんも大活躍！



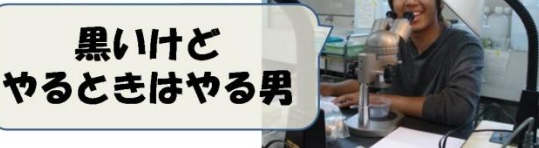
某実験の自由研究
関係ない連中も巻き込み
みんなで大学に
2m以上の穴を掘った！
レポート？なにそれ



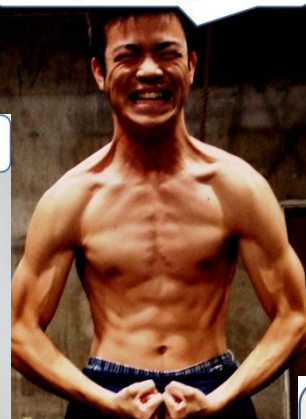
井口もすっぽり！
最高に楽しかった！



黒いけど
やるときはやる男



どうですか！？



カ
ツ
チ
カ
チ
や
で
〜

Mr. テキトー



こいつ
何がしたい？

鳥人間コンテスト
飛んだぞー！

鳥取砂丘で大暴れ！！
このあと温泉でヤクザが現れた！



特集：卒業

“what”

工藤 敦子（筑波大学 生物学類 4年）

大学生生活4年間の中で、印象に残ったこと、変わったこと、感じたこと—いろいろありすぎて、というよりはまとまりがなさ過ぎて何も書けない、というのが今 word の画面に向かって思うことだ。サークルも変えたし、バイトも飲食から接客、塾講と転々としたし、授業や実験・実習も、大学生のわりには広く浅くだったと思う。そのたびに一喜一憂したこと、ちょっとずつ変わったことをまとめて“学生時代”なんてえらそうに語れるようになるのはきっともっと時間がたってからだろうと思うので、卒業を間近に控えた今、4年間を通して、特に3年生までの実験や今も進行中のラボでの実験を通して、変わったと気づけたものについて綴ってみたいと思う。

週の授業の半分を英語に割くような高校だったために、実験などもほとんどなく、高校時代に私が触れた生物学の知識は全部受身で与えてもらったものだった。細胞の微細構造、イモリ胚の発生、メンデル遺伝も、すべて教科書やテキストに書かれていて、それを授業で教わり、試験に向けて覚える。新しい知識を得ることは楽しかったし、現象や構造の名前だけを暗記するのではなく、それがどのようなものなのか理解したうえで勉強出来ていたと思う。しかし、楽に手に入れたためか、これらの知識そのもの、つまり「何なのか、どのようなものなのか」にあたる“what”にあまり興味は持ってこなかった。それよりも「何故そうなるのか」の“why”や、「どうやってそうなるのか」の“how”に興味があった。むしろそれにしか興味がなかった。生物学類に入ったのも、“how”や“why”をもっと知りたかったからだった。

今ではとても信じられないくらい真面目にやった受験勉強の末、入学した筑波大学で、最初のうちは“why”を迫る生態学か、“how”を知るための生理学をやりたいと考えていた。一方で、今身をおいている分類学のことは「ダサイ」とすら感じていた。ちょっと節の数が違うとか、膜の数が違うとか、鞭毛装置の構造が違うとか・・・そんな細かい違い「だから何だっているんだ」と思っていた。

そんな先入観を持ちながらも、いろんな実験や実習でいろんな生物に出会った。基礎生で見せてもらったウニの幼生、発生学実験で追ったイモリ、オオバコを捜し歩いて気づいた雑草の数々、下田と菅平でであったたくさんのヘンなやつら・・・気づけば生き物を“見る”ことができる実験が一番好きだった。物質や、遺伝配列だけで何か言うのに違和感を持った。もちろん生き物を知る上で、物質を切り口としたり、遺伝配列を利用することを否定する気はない。それはそれで大切なアプローチだとはわかっている。ただ、短い（とも限らないかもしれない？！けれど）研究室生活、たくさん生き物を見ていたいというわがままな気持ちで、今いる植物系統分類の研究室に入った。

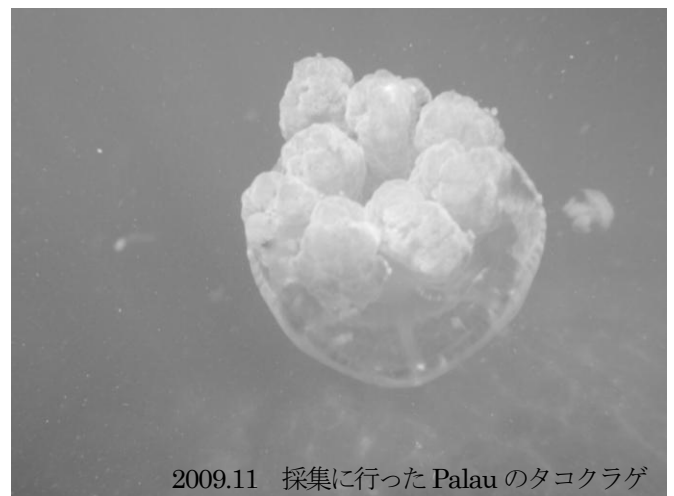
ただ、研究室配属が決まった時点では、完全に分類に染まるとは思っていなかった。分類の研究室で、ミクロの生態学みたいなことをやろうと考えていた。分類学はあくまで“method”だと、何もわからないながらにずいぶんあつかましいことを考えていたと今は思うけれど（苦笑）。

けれど微細藻の世界、プロティストの世界に入ってみて、高校のときに大前提の知識として、何のありがたみもないものとして受け取っていた“what”が、まだまだ分かっていないのだと知った。細胞の構造や生活環すら分かっていないプロティストはたくさんいるのだと。と同時に、“how”や“why”を知るためには、まずは“what”を知らないといけないのだということに気づいた。

どういったらいいのかわからないけれど、一つだけいえるのは、「分類学」に誇りをもっているということだ。まだ入り口にたったにすぎず、分類の“ぶ”の字の点一つにも満たない私だけれど、まずは見ることに、そしてその生き物を知ること、これを大切にしたいと感じている。

そして、生物学の世界で学んだこのことは、これからの人生で、他のなんにだって応用できると思う。身近な人間関係だって、政治だって、なんだって知ったかぶりして小難しい理論を練ることは簡単だけれど、相手を、起こっていることを、ちゃんと知ることから始めないといけないと、今はそう考えることができる。

ある先生が「分ける（＝分類する）ことは、分かること。」とおっしゃっていた。本当にその通りだと思った。卒業という節目を迎え、学類生から院生へ肩書きは変わるけれど、あと2年、「分かった」を増やしていけたらと思う。“what”の価値に気づかせてくれたすべての実験と実習とラボに感謝したい。



2009.11 採集に行った Palau のタコクラゲ

特集：卒業

キセキ

木場 隆介（筑波大学 生物学類 4年）

明日、今日よりも好きになれる
溢れる想いが止まらない
今もこんなに好きなのに
言葉にできない

君のくれた日々が積み重なり
過ぎ去った日々
2人歩いた「軌跡」
僕らの出逢いが
もし偶然ならば？運命ならば？
君に巡り会えた
それって「奇跡」

2人寄り添って歩いて 永久の愛を形にして
いつまでも君の横で 笑っていたくて
アリガトウや Ah 愛してるじゃまだ足りないけど
せめて言わせて 「幸せです」と

—GReeeeN「キセキ」より歌詞引用—

俺が筑波大学4年間で歩んできた『軌跡』
それはかけがえのない仲間たちに出逢えた『奇跡』
この想いは俺の人生の中で燦然と輝き続けるであろう『輝石』

数々の『キセキ』をアリガトウ
時を越え この熱き想いを胸に刻もう Just Forever

特集：卒業

或る学生の4年間における挙動がもたらす単位取得に与える影響について

酒井 典之（筑波大学 生物学類 4年）

背景・目的

この学生は2006年度のセンター試験を受験し、その後、当大学を志願し、合格を果たした。（余談だが、この年は初めてセンター試験にリスニングが導入された年であり、また当大学において学群学類の再編⁽¹⁾が行われる直前の年だったと記憶している。よってこの学生は‘生命環境学群 生物学類所属’ではなく、‘第二学群 生物学類所属’となる。）その結果、この学生は4年間（平均）という大学生活を獲得した。そして、この学生は自らに「卒業」という目標を課し、さらに、その目標を最低限のエネルギーでもって達成するという2010年の流行でもある‘エコ’な課題まで追加した。ただし一般的に言う「やる気」という概念に関しては、本研究の観察対象である学生において言及してはならない。本研究はこの学生が無事か否かはどうあれ、卒業という目標達成まで2010年1月19日において、どの程度近づきつつあるのかをただ単に記録したものである。

材料・方法

本研究の観察対象に用いたこの学生は、凡そ4年間、つくば市内もしくはその近辺で自由奔放に生育させた⁽²⁾。移手段は主に自動車と歩行運動により、また主な炭素源などの生育に必要な最低限の栄養の摂取は弁当や学食を利用させた。観察は主に目視によって行なった。

この学生が卒業できるか否かは TWINS 上の記録 (Figure 1) から読者が各自で判断して頂きたい。また成績を開示するにあたって、この学生からの了承を得た。

結果・考察

結果は Figure 1 の通りであった。目立って出来が良かったという授業科目はなく、可もなく不可もなく、否、不可は少々といったところであった。4年次の2学期までにおける観察では、単位の呪縛から解放された周囲の学生たちが卒業研究に没頭している最中、卒業を賭けて講義に参加していたこの学生の姿が確認できた。また、この学生は他の学生との交流を得意とせず、孤独を気取る傾向にある⁽³⁾ のだが、稀に親しく接してくれる学生が存在し、それらの学生たちと通常や集中の講義などで遭遇している様子も観察できた。私見だが、彼らもまた卒業を賭けて講義と向かい合っていたのだと考えられた。そして4年次の3学期における観察では、Figure 1 の通りに、本学期に取得予定の単位を除く、卒業に必要な最低限以上の単位を取得したため、卒業研究に励んでいる様子が観察できた。ただ、この学生は非常にマイペース

で‘クセ’が強く、研究への熱の入り方にムラがあるように感じられた。所謂「やるときゃやる」タイプに分類されると推測された。

以上より、当該学生は卒業研究の単位さえ取得できれば、2010年3月に卒業は可能と推察された。

科目区分	合計単位数
専門科目(必修)	7.0
専門科目(選択)	23.0
専門科目(自由)	32.0
専門基礎科目(必修)	16.0
専門基礎科目(選択)	9.0
専門基礎科目(自由)	6.0
基礎科目共通科目総合科目A(必修)	6.0
基礎科目共通科目総合科目A(自由)	2.0
基礎科目共通科目総合科目B(必修)	1.0
基礎科目共通科目体育(必修)	2.0
基礎科目共通科目第1外国語(必修)	4.5
基礎科目共通科目情報処理(必修)	2.0
基礎科目関連科目(自由)	11.0

Figure 1: TWINSにおける観察対象の成績の概略 (2010年1月19日現在)

謝辞

当該学生に対し、単位等の助言を下された諸先生方、特に学類支援室の方々に厚く御礼申し上げます。また、長年にわたって調査・記録に協力して下さった研究室のメンバーに対しても、心より感謝の意を表したい。

参考文献

1. ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/>)
2. 男子大学生育成理論 (酒井○之 著, 茨城非科学同人, 2005)
3. 孤独感が与える脳への影響 (酒井典○ 著, 非科学同人, 1985)

特集：卒業

卒業するころには、

白戸 秀（筑波大学 生物学類 4年）

4年くらい前、卒業するころにはもっといろんなことがはっきり分かっているのだろう、と思っていた。でも、やっぱり、いろんなことは、今もまだよく分からないままだった。そしてこれからも、よく分からないままなのではないだろうかと思う。

☆

夕方、ラジオをつけると、相撲。いつの間にか、僕と同年のモンゴル人が横綱をやっている。すごい。いや、同年じゃない、一つ上だ。

☆

ところで、道端で出会った知らない人シリーズ。
ある朝、筑波大学のシンボルである筑波山に毎日登るおじさんに会った。連続登頂回数をゼッケンみたいにして、シャツに貼ってあった。新聞にも載った、と言っていた。
別の日、つくばの水源である、水郷、霞ヶ浦の西浦を自転車で100周することを目標にしているおじさんに会った。61週目だった。100周したらどうするんだろう。たぶん、200周だろう。
それから、農業技術センターで散歩をしていたおじさんは、「銭儲け」をする方法を説明した後、4時から水戸黄門の再放送を見るために慌てて帰って行った。どうしたら金持ちになれるのかは、結局よく分からなかった。
ある夕方、河原で犬に追いかけられた。犬を連れていたお婆さんは、僕に「犬は苦手ですか？」と聞いた。逃げながら「そんなでもないです」と答えた。「一日3食あげていたら、子犬だったのに、こんなに大きくなっちゃった」大きかった。

☆

夜、ターバンを巻いた外国人に話しかけられた。「タイヨウヒトツ、カミサマヒトツ、all right?」オーライ。

☆

別の夕方、写真を撮っていたら、買い物途中のお婆さんが不審の目を向けてきた。じろっと。「水たまりの写真を撮っているだけです」「あら、わたしも撮ろう」

誰かに会えるシャンゼリゼ通りで女の子二人組が話しかけてきた。「……………シルブプレ?」「I don't speak French」二人は去って行った。シルブプレだけ聞き取れた。おお、シャンゼリゼ。

☆

そろそろ、最近心に残ったフレーズ引用シリーズ。
「すべてのものを遠心分離してやりたい。すっきりするだろうに」（友人）
「むろんこれは些細なことですが、些細なことほど重大視すべきものはありません」（コナン・ドイル、シャーロックホームズの冒険）
「ドンキホーテのように人生の苦難という名の風車に立ち向かったのです」（ジャン＝ピエール・ジュネ、アメリカ）

「Because the sky is blue it makes me cry」（ビートルズ、Because）

少し酔っぱらったインド人の女の子が夜中、道端で歌い始めた。「Cry」がうんと伸ばされていた。空が青い日はいつも彼女の歌を思い出す。

☆

すこし遠回りして大学に向かう。遠回りして家に帰る。田んぼの向こうに国土地理院のパラボラアンテナある。「星が伝える大地の動き」

大抵は、じっと真上を見上げたまま。時々、動く。軽快。



☆

いいところに立っている。いいパスが来る。だけれど、ゴールに蹴り込めない。空振り、転び、メガネが飛ぶ。

チャンスを生かせない僕。

毎週末、タイ人たちとサッカーをしていた。こんな僕にも、彼らは、パスを出し続けた。これから、だんだん、チャンスを生かせる僕になっていく。

もちろん、サッカーに限らず。

2010年、チャンスを生かせる僕に
2011年、ゴールネットの向こうへ

特集：卒業

この4年間を振り返る

新行内 隆明（筑波大学 生物学類 4年）

どうもまだ卒業という言葉を意識できない。あまり卒業の実感が湧かない。来年と再来年は筑波の院で研究生活を送ることが決定となっており、今まで同様にこの地で過ごすことになるからだ。まだ学生生活は続くのだ。だから卒業に向けて文を書くといっても、正直難しい。しかし締め切りが迫っている。とりあえず、学生生活4年間のまとめの様な文を書くことにする。この文が、数年後に読み返した際にこの4年間を鮮明に思い出せる様な内容となるのを願いながら。

まずは生物学類について。入学以来、様々な分野の講義を受けてきた。生化学の様なマイクロな分野から生態学の様なマクロな分野まで様々な講義が開講されており、生物学を学ぶ学生にとっては非常に恵まれた素晴らしいカリキュラムだったと思う。実験や実習も数多く開設されており、自分の興味のある分野のものは全て取らせて頂いた。数多くの生命現象を実際に観察し、それに感動したこともあった。それらで培った知識と技術は、現在の研究や実験補助バイトにおいて大いに役に立っている。学業以外にも、やどかり祭へ向けての御輿作り、大学説明会、つくば生物ジャーナル、バイオeカフェなど様々な活動に関わることができた。充実した生物学類生ライブを過ごせたのではないだろうか。

次に学園祭実行委員会について。ほぼ勢いのみで入った委員会だったが、気がついたら自分とは切っても切り離せないものとなっていた。確かに物凄く仕事が大変だった。執行代だった2年の時は夜中まで仕事に追われ、しばしば一学B棟にあるソファで寝ることになった。そんな仕事に追われた自分の周りには、同じように学祭を成功させようと頑張っていた仲間がいつもいた。共に励まし合いながら過ごしたあの忙しくも熱い日々、今となっては最高の酒の肴である。そして迎えた学祭本番、最終日の後夜祭のフィナーレの時には涙で前が見えなかった。これ以上無い濃いメンバーで過ごしたあの2年間、本当に素晴らしい夢を見ることができた。そんな素敵な夢も、今はよき思い出、決して色褪せることのない素敵な思い出となって残っている。

そして吹奏楽団について。やどかり祭の御輿作りの際に誘われ、見学に行ったのが始まりだった。その後入団し、小学校以来7年ぶりに再びユーフォニアムを吹く事になった。最初のうちは周りより明らかな技術の差があって、合奏に出るのが嫌で仕方がなかった。このままではダメだと、教則本を買ってきて楽器の練習に明け暮れた。その甲斐あってか、3年からは様々な舞台に立って演奏する事が出来た。吹奏楽コンクールで県大会を突破して新聞に載ったり、引退の記念演奏会を大成功に終わらせたり、OB有志でアンサンブルコンサートをやったりと様々な演奏に参加できた。上の学園祭実行委員会においても言えることだが、こうした活動を経て知り合った仲間は、学生時代における何にも代えられない宝だろう。またいつか、皆で集まって音楽やれる日が来ると信じている。

他にも春休みにニュージーランドに語学研修に行ったり、某研究所でアルバイトして実験技術を学んだり、一人でちょっとした旅に出たりと様々なことをやれ、良くも悪くも学生として非常に有意義な4年間を過ごすことができた。本当に楽しい4年間だった。残りの学生生活も有意義なものにしたいものだ。



(ニュージーランドでホストファミリーと)

特集：卒業

キリン柄はそんなに熱くない・・・

新谷 浩章（筑波大学 生物学類 4年）

どうも、新入生歓迎会委員長をやってから、まったく表舞台に出なくなつた新谷です（笑）まず、今回3年生が『卒業文集を作ろう』という素敵な企画を立ち上げてくれたことに深く感謝します。この忙しいときに、よくまあ仕事を増やしてくれたな・・・と（笑）まあ、個人的には文章を書くということは嫌いではないので、楽しみながら書かせてもらいましたが！

さて内容ですが、タイトルからパチンコを連想した人には申し訳ないけれども、全く関係ない話です！大学に入るまで、あるいは入ってからというものを振り返ってみようかと。だからつまらない文章ですよ・・・。ごめんね。でも、ひっかかった人が悪い（笑）

...

現役時代の俺は、筑波大に入るなんてちっとも思っていなかった。ただなんとなく受験勉強をし、ただなんとなく獣医学部を受験した。結果はもちろん惨敗・・・といっても、受験したのが国立入れてたったの2校という、完全に人生をナメくさったガキだった。そんな俺は、浪人中に出会った仲間とつるむうちに、『教員になりたいな』という気持ちが芽生え、いつしか筑波大を目指すようになっていた。無事大学に入学し、クラスというものが割り振られた。どんな素敵な出会いが待っているのだろう・・・そう思う間もなく、真っ先に目に飛び込んだのが奴のほいていた“ゲタ”だった。もう誰かはお気づきか？（笑）最初は、秋田から南下してきたただのヤンキーだと思っていたが、互いの夢を語ったり、一緒にトレーニングをしたりするうちに、今では大学で一番の親友になっている（相手はどう思っているかはわからんが・・・）！！今思えば、あいつがいなければ今の俺はいないのかもしれない。

大学で俺は部活もやり、バイトもやり、頻繁に飲み、空いた時間に勉強をするという、親には言えない生活リズムを送っていた。日々の生活は単調なようだったが、ところどころにアクセントがあり、なんだかんだ楽しく過ごすことができたのは本当によかったと思う。

（準硬式野球部 vs 城西大学 @千葉大学グラウンド（引退試合直後）一番下左から4番目；俺、吉田（3年）はこの日いなかった??笑）



何にも問題なく進んでいた大学生活だったが、4年生になってからは本当にいろんなことがあった。ありすぎて、正直しんどかった。ふと一人になると弱気なことを考え、抱えた問題を悪いほう悪いほうへと考えてしまった。そんな中、つくづく感じたのが、仲間の大切さだ。苦楽を共にしてきた仲間には、男女問わず何だって話せる。何かあるたびにメールしてしまった自分が、今では恥ずかしいが（笑）どれほど精神的に助けられたことか！俺の相手をしてくれた奴らに、この場を借りて感謝の意を表したい。本当にありがとう。君たちのおかげで、これからどんなに辛い結果が待っていようとも、少なくとも俺はそれを受け止める準備ができた。

...

なんだか湿っぽくなってしまった・・・。つまりところ、俺が俺自身やみんなに言いたいのは3つ。

- ① いい仲間と出会えたら、感謝しようぜ！
- ② 人生は一度きり、悔いを残すな！
- ③ 卒業できてよかったね！笑
- ④ 翔一、くじけずよく頑張った！！笑笑

以上！！

卒業生のみなさん、かわいいかわいい3年生のみなさん

ありがとう！！

そしてすべての卒業生（チルドレン）へ

おめでとう！！

（旅行先のPALAU 共和国 セブンティー・アイランド ヘリより撮影）



特集：卒業

大学生活を脈絡なく振り返って

鈴木 美季（筑波大学 生物学類 4年）

つくばに（というか茨城に）初めて来たのは、4年前の3月でした。他大学の前期試験に落ちた直後で気分は落ち込んでいましたが、つくばセンター付近を散歩していたときに、直感的に「街の雰囲気が自分に合っているな、ここなら上手くやっていけそうだな」と感じたことは今でも覚えています。

筑波大学の第一印象は、やはり「広い」です。1年のあいだは、降りるバス停を間違えたり、構内を歩いている途中でどこかの棟に迷い込んだりして、焦ることが多々ありました。レポートを出すために生農棟へ行くけど、先生の部屋がわからなくて棟内をうろうろすることはしょっちゅうありました。4年経って、ようやくこの広さにも慣れたかなあ・・・と思います。今でもよくわからない場所は構内にたくさんあるけど。

大学1年のころは、コンパに参加したり、クラスの友人達と講義に出たり、サークルでバンドの練習に励んだりして、大学生活を満喫していました。基礎生物学実験では苦手なカエルの解剖もしました。ドラフトの中に山積みになっているウシガエルを見たときは、ギャグではなく帰りたいと思いました。しかし、意を決してメスを入れると知的好奇心が勝ようになり、生物というのを改めて考えさせられる体験にもなりました。

大学2～3年前半は、サークルの運営に携わっていたこともあり、サークル活動に力を注いでいました。私が幹部になった頃には所属サークルもかなり大所帯になっていて、大きな組織を動かすことの大変さを実感しました。しかし今振り返ると、とても良い経験になったと思います。学類のほうでは、1年の頃よりも講義の専門性が増すのと同時に、先生や院生の方達とコミュニケーションをとりやすくなりました。とくに印象に残っている活動は、実験や実習です。植物系統分類学実験Ⅱで、果物を顕微鏡で観察したあと、みんなで食したことは良い思い出です。2年の夏には、下田の生態学臨海実習に参加しました。この実習では、人生初のシュノーケリングを体験しました。下田の海には魅了されました。ここに挙げた実験・実習だけではなく、どの講義でも興味深い話が聴けて、のちに研究室を選ぶ際の悩みの種にもなりました。

3年の3学期には、いよいよ研究室に配属されることになりました。大学に入る前から漠然と「植物を中心とした生態学を研究したい」という思いがありました。2～3年でいろいろな分野の研究例を聴いていくなかで、花の形態学にとくに興味をそそられることに気づき、今の研究室に落ち着きました。途中、分類学や生理学もいかなどか、菌類と植物の関係を調べるのもおもしろそうだなとか・・・色々迷いましたが。

3年の冬以降は、それまでのいわゆるキャンパスライフとは一転して、研究に励む毎日になりました。サークル仲間とは、相変わらずよく遊んでいるのですが、学類の友人と話す機会が減ったのは寂しいところです。たまに会って話を聞くと、研究室によって生活スタイルも全然異なるんだな、どの分野も忙しそうだ

な・・・と思うのと同時に、私もうんざりなくちゃという気持ちになります。研究についてはまだ駆け出しなので振り返りたい気持ちにはなりません・・・子供のときから生物に対して感じていた「なぜ」を追求していると思うと嬉しい気持ちにもなります。

いま振り返ると、筑波大学での4年間は、とても充実していました。このように充実した生活を送れたのも、周りの人々に恵まれたおかげです。学類の友人もサークルの友人も、みんなサバサバしていてノリがいいけど、まじめで努力家で、見習うべき面もっています。大学生活のなかで関わった全ての人に、感謝したいです。4年間、ありがとうございました！これからもよろしくお祈りします！



写真：下田の実習にて。ヨコエビを並べてつくられた「ヨコエビ」（三藤氏作）

特集：卒業

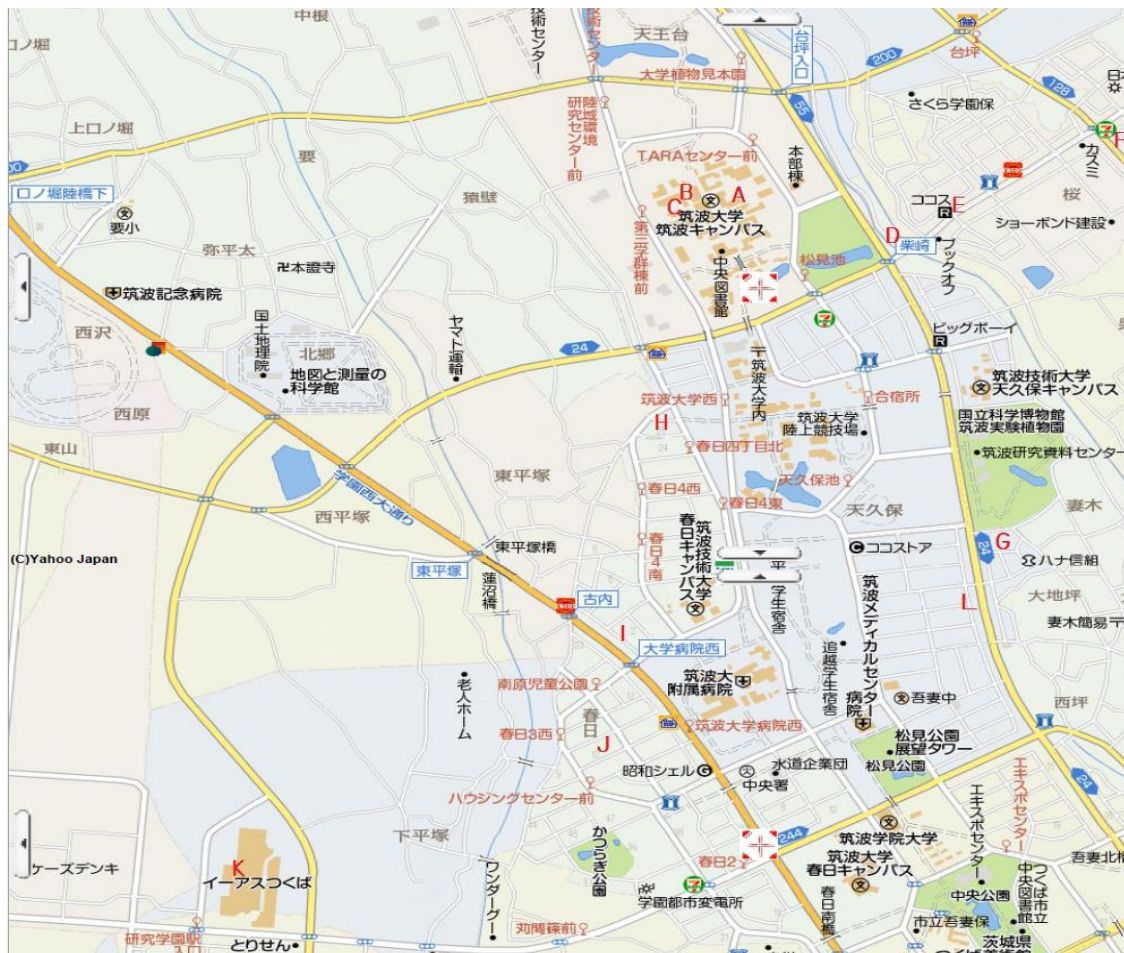
卒業研究

高山 幸次郎（筑波大学 生物学類 4年）

大学生活で一つ確実に頑張ったことは食べることでした。本文集では、4年間の集大成として大学周辺の本当においしいと思ったお店、思い出のお店のガイドマップを作製したいと思います。以下、各アルファベットは地図中のアルファベットと対応しています。

- A: 裏二★★☆ 2～3年生の時は週4で通っていました。鍋焼きうどんには本当にお世話になりました。
- B: 三食★☆☆ 豚丼、好きでした。リニューアル前は一食ずつ作ってくれて今よりよかった・・・。
- C: 三学フードコートうどん屋★☆☆ カレーうどん美味しいです。
- D: 牛角★★☆ 店員さんがよく教育されていて素晴らしい。
- E: ルパングリグリ★★☆ 寡黙なご主人が作られるバケットサンドが美味しいです。
- F: Hi-5★★★★ 食べやすく美味しいハンバーガーが好きでした。また辛口ジンジャエールをここで初めて飲みました。美味しくてびっくりしました。
- G: ミラ★★★★ シーフードカレー辛口とマンゴーラッシーが◎

- H: 炙り屋びん★★★★ ばったり会った新谷君においしいゆず酒を奢ってもらいました。その節はどうもありがとう。
- I: 松屋☆☆☆ バイトを週5でしていた時に週4で通っていました。僕は「すき屋派か松屋派か」と聞かれたら松屋派と即答します。
- J: プリムローズ★★★★ 星3つじゃ足りません。もっと早く出会っていたかった。パスタに入っているベーコンが滅茶苦茶上手い！
- K: とんQ（イーアス内）★★☆ イーアス内の飲食店で一番好きです。サービスも◎
- L: 民芸★☆☆ 今は亡き民芸です。前田君とバイト終わりによくお世話になりました。



特集：卒業

卒業??

武部 尚美 (筑波大学 生物学類 4年)

卒業…って実感がなく過ごしてきた4年目の大学生生活。

この時期になって、卒業して就職する友達といるとふと「卒業」なんだと感じる。何か不思議な感じ…。来年からはこの人は先生なんだ、この人は会社に入るんだ…となんとなく思う。あと2年、「この選択をしたことがよかったと思えるかな。いや、そうしたい!」と考える今日この頃。大学生としてやり残したことはたくさんある。勉強もトライアスロンも1人旅も。。。大学生と大学院生はなにかが違うんだろうけど、学生として学生らしいことを思いっきりやっていきたい。

大学に入って、高校の友達に大学生活の話をするとう「変わったね。」ってよく言われるけど、未だにそのギャップに戸惑う。まあ、こんなもんでしょ (笑) 頑張れ、私!

なんだかんだでこんな私と出会ってくれて、いろいろ思い出をくれたみんなありがとう。そして、これからもよろしく。

特集：卒業

大学生活で得たもの

谷口 由佳（筑波大学 生物学類 4年）

私はこのつくばという特殊な環境の中で、貴重な体験ができたと感じています。まずは、一人暮らし。これは、なかなか出来るものではないし、今まで親に頼りっきりだった身の回りのことを自分でこなさなくては行かず、そして何より実家では当然のようにいた家族が周りにおらず、一人ぼっちで生活しなくては行けないということなど、不安ばかりを感じていました。実際に始めてみると、やはり全く知らないつくばの地で周りに頼れる知り合いもおらずに生活することは、簡単なことではありませんでした。大学という場は人も多く、その中で自分が埋もれてしまいそうでした。

しかし、サークルやクラスの子達と徐々にですが、打ちとけ合っていく、仲間と呼べるほどの関係を築くことができました。それまでは、人見知りもあり、なかなか初対面の人と自然に話すことができませんでした。今では、年上の方、同学年の子、そして後輩と誰とでも自然に会話することができるようになりました。

このことが、何よりも私の大学での収穫であったように思います。

そして、もうひとつ学んだことはバイトです。

私は飲食店のバイトを主にしていたのですが、その中でお金を稼ぐことの大変さ、人間関係、など社会に出るための練習ができたと思います。普段の生活では関わることのない社員、社会人の方々とお話しすることは人生の先輩の意見を聴ける貴重な場であり、考えさせられることも多かったです。また、バイトの仲間でも、サークルなどでは出会えない、全く異なった趣味を持つ人や、大学生ではなく別の道を選んだ同い年の友人など、普段の生活では関われないような人たちに触れることで、自分の考え方が変わったり、励まされたり、さまざまな経験をすることができました。これはきっと、将来につながる、とても貴重な体験であったと思います。

大学とは中学・高校よりも専門的な知識を得ることができる、場所であると考えていました。確かにその通りなのですが、それ以上に、大学の中で最も得られたことは他者との関わり方、人間関係の築き方であったように感じます。特に、つくばでは一人暮らしであるため、自分のことを自分で行うという自立と、自分がサボれば自分に返ってくるという自己責任、そして、ほとんどの決断の自分一人で行わなければならないという自主性が磨かれる場であったと思います。

私は大学院に進学するので、まだつくばには残りますが、学類は異なるため新しい環境に入ることとなります。そこでも、これまで培ってきた経験を活かして、より成長したいと思っています。



特集：卒業

筑波ライフ → ∞

田淵 紗和子（筑波大学 生物学類 4年）

筑波大学生の間に出会ったあれこれ・・・

☆おしゃべりした人々の出身国

- Japan
- Colombia
- China
- Taiwan
- Korea
- Australia
- The United States of America
- Canada
- Mexico
- Peru
- Chile
- Brazil
- Fiji
- Mongol
- Russia
- Philippines
- Brunei
- Thai
- Nepal
- India
- Sri Lanka
- Tadjikistan
- Uzbekistan
- Georgia
- Saudi Arabia
- Turkey
- Bulgaria
- Mordvinia
- Estonia
- Czech
- Germany
- Denmark
- Switzerland
- Netherlands
- France
- Spain
- England
- Egypt
- Libya
- South Africa
- Tunisia
- Uganda ...etc.

☆訪れた国と地域

- The United States of America
 - * Arizona
 - * California
 - * Illinois
 - * Texas
 - * Nevada
- Australia
 - * Melbourne
- Switzerland
 - * Adelboden
 - * Bern
 - * Zurich

☆かわいい生き物

- オオマリコケムシ
- クマムシ
- とりあえず、マウス
- ホコリタケ

☆つくばの景色

- 総合研究棟 A からの夕日
- 大学会館付近街路樹の紅葉
- 生物農林学系棟 8 階から見える牛久大仏
- 中央図書館 5 階から見える筑波山

☆驚きの食べ物

- ランランの丼（=私の 2 食分）
- サメ（茨城県民はフライにするらしい）

☆その他

- 偉大な先生方
- 親友
- 最高の茶道の師匠
- 観世流 能
- 様々な方言
- 新たな自分 ...etc.

4年間の出会い=My treasure

4年間の出会いによるつながり+これから=Infinity ∞

特集：卒業

大学四年生の僕

長谷川 瞬（筑波大学 生物学類 4年）

卒業文集の話を書いたとき、最初は大学在学中に起こった印象に残った出来事を書いていこうかと思っていました。しかし、何か思い付くわけでもなくとりあえず友人に何を書くか参考に聞いてみたところ、その友人に「何書こうかなあ…みんなが『何これ？』って思うようなこと書こうかな。忙しいのに真面目に思い出とか書く気起きないし…」と言われてしまい、なんだかそのまま思い出を書くのも悔しいので、少し書き方を変えることにしました。

今の自分は数年前想像していた自分とは大分異なります。おそらく数年経ったら同じようなことを思っていると思います。十年後、二十年後、もっと後の自分や僕をよく知る友人達がこの文集を読んだとき、今の僕が何を考えていたか、どうするつもりでいたか、数十年後の自分をどんな風に想像をしていたかを思い出す手助けとなり、そしてその時の自分と今の僕を比較して楽しむことができるようなものを書きたいと思います。

一年生の頃からよくつるんでいる同じクラスの男子が二人います。それぞれの興味も趣味も違ったので一年生の頃は三～四年後にはそれぞれ違う研究室に入り、違う研究をし、違う道を進み始めるのだろうと漠然と考えていました。同時に、なんだかんだみんな筑波の大学院に進学しこの先六年くらいは一緒にいるのだろうと根拠もなく想像していました。しかしそれから四年弱が過ぎた現在、一人は菅平の実習施設に行き、修士号、博士号もそちらで取得するつもり、一人は来年度からは総合研究大学院大学の国立極地研究所に進学、そして僕は英国のマンチェスター大学に現在留学中で大学院に関してはまだ決まっていない状態、と予想とはほとんど違う現在になりました。

ほとんど別れ別れになった僕たちですが、この先の関係はどうなっていくのだろう。物理的な距離があるのでそこはどのようなものですが、何年先でも定期的に会えるといいなと思います。つくばには彼らを含め話の合う友人が多いので、何年後でも連絡が取れさえすればと思います。

この先の関係も気になりますが、将来自分も含め皆何をしているのかということも非常に気になります。大学生になり色々な場面での選択肢が増えたせいも現在の自分は一年生の頃の自分からは想像のしていなかったことをしています。四年生の自分が英国に留学しているとは当時の僕はほとんど想像していませんでした。

今の僕はどこの大学院に行こうか迷っています。修士課程は英国、博士課程は米国で行えたらと考えていますが、日本でやりたい気持ちもあります。また、博士課程には進みたいとは思っていますがはっきりと決めたわけではありません。留学が終了するのが今年の六月または七月の為卒業もみんなより遅れてしまう

こともどこの大学院に進むか迷っている要因の一つです。留学後のことはおそらく三月頃にはある程度はっきりした目処が立つんじゃないかと思っています。今は色々なことを迷っているので、五年後でさえ自分が何をしているのかほとんど想像できません。もしかしたら日本以外の国で博士課程にいるかもしれない。もしかしたらもう働いているかもしれない。将来は植物環境生理学、生物地球科学、自然保護の分野の研究者になるつもりですが、何年後か先にはまた違う進路に進んでいるかもしれません。

周りの友人たちは何をやっているだろう。親しい友人の多くが、一般の企業で働いている姿は正直あまりイメージできません。研究者になっている人も何人かいるんじゃないかと思っています。とりあえず皆修士課程には進むようで僕意外は来年度の進路も決まっています。博士課程に進むかどうかを悩んでいる人たちも割りといます。三年後にはかなり進路が別れ、何人かは就職をして働き始めるんじゃないかと思っています。あまり、想像はできませんが。

誰が一番最初に結婚するのかなども、たまに考えたりもします。皆とりあえずは来年進学するので、中学高校時代の友人たちとは全体的に遅めになると思います。さすがに十年後までには誰か一人くらいは結婚してるんじゃないかとは思いますが。男性陣は女性陣より少し遅めになるんじゃないかと勝手に思っています。根拠は、なんとなく皆の性格的にというだけですが。

とまあ、大学四年生の僕は現在こんなことを考えています。将来の僕は何を、何を考えているだろう。ここで書いたような内容の範囲で収まっているかもしれないし、まったく違うことになっているかもしれません。何年後かにこれを見たとき少し比較してみてください。

ここに書いた内容を将来の自分が見て実質的に役に立つ情報かは分かりません。何か利用できるか、という点ではあまり意味のないものになると思います。しかし、将来の自分を楽しませることはできるんじゃないかと思っています。

将来の自分がこの文章を面白そうに読んでいるところを想像しながら文章を締めくくりたいと思います。

2010年2月2日 長谷川瞬

特集：卒業

卒業文集(* / ω \ *)

服部 桂祐 (筑波大学 生物学類 4年)

僕は、今年で卒業します。
とても楽しい大学生活でした。
でも、ちょっと悲しい経験をしました。
その経験について書きます。

僕はまだ二年生で、車を持っていませんでした。
なので、バイトは原チャで通勤していました。
あれは冬の夜中でした。
いつものように、バイト先の常連さんで少しゲイのおじさんに、
お金を貰った帰りの出来事です。
ブーーーーン、と原チャを飛ばしていました。
キキッ、とカーブを曲がろうとしたら、
ぐらつきました。

そして、そのまま転倒。

やはり、転倒する直前は走馬灯。時間の流れがゆっくりになりました。
顔面から転落しそう、その時
ヤベッ、顔から落ちたら、一生ものの傷ができる。
と考えると、悩んだ結果、顎から落ちることにしました。

ドーーーーン!!!

.....

\(/ ロ \) ココハドコ? (/ ロ °) / アタシハダアレ?

一瞬何が起きたのか分からなくなりました。
でもすぐに状況を把握して、なんだか恥づかしい気持ちになりました。
人前で階段を踏み外すような、そんな恥づかしさです。
なので、逃げるようにして帰りました。とんずら!!
そして、ふつうに家に帰ってきて、テレビを点けて少し休みました。
そろそろ風呂に入ろうと思立って、洗面所に行きました。
鏡を見ました。

.....

.....?

顎がない.....

えっ!顎がない!!

びっくりしました。
だって、顎がないんだもの。
普通に生活していて顎がなくなる訳がありません。
半泣きです。
とりあえず、車を持っているTくんを呼びました。
病院に連れて行ってくれと。
すぐさまA病院に連れて行ってくれました。

A病院に着くなり、なんか先生がいないとかなんとかで、すぐさま違う病院に行ってくれ、と言われました。

流行りのたらいまわしです。

そして次はB病院。

B病院は快く受け入れてくれました。
すぐに処置をしてくれるとのことで案内されて待ちました。

隣には、酒を飲みすぎて倒れて、股間から管が出てる人がいます。
そんな面白い状況だけど笑えません。
先生が来てくれて、縫ってくれました。
しかしこの先生は、夜勤の医学生で未熟な人らしいです。
僕の人生はこの未熟者に託されました。
隣で酔っ払いがグチグチと日本語ともつかない言葉をぼやいて
いる中、僕は先生に、治るんですか? 治るんですか?? と泣きじ
ゃくって治療されていました。麻酔をかけられたので、口元が緩
んで、よだれがダダ漏れでした。

そして卒業を目前にして今、僕には顎があります。
正確には顎の下の皮を強引に持ってきた顎です。
傷口はだんだん見えなくなってきました。
しかし、その縫い目だけは、ヒゲが生えてきません。
多分一生生えないでしょう。

僕はこれから社会人になります。
きっとそのうち結婚もして、子供ももつでしょう。
その時に、子供に言ってやるのです。

原チャには乗るな、と。

えんやにつづく二二二 (^ ω ^) ニコバーン

特集：卒業

藤子、旅立ちますっ（`・ω・´）ゞ

筑波大学 生物学類 4年 藤田 圭子

月並みな言葉で申し訳ないけれど、4年間の大学生活は本当にあっという間で、もうすぐ終わっちゃうんだねえ。。。

- 1年生→ゆかコンに必死、みんなの名前を覚えるのに必死、講義に必死、レポートに必死、初めての一人暮らしに必死、夏と冬を乗り越えるのに必死…。でも、あだ名が出来て、親友が出来て、クラスで遊んで…。これからの生活に期待を抱く1年目。
- 2年生→価値観の違いに悔し泣きもしたけど、少しずつ余裕が出てきた2年目。後輩もできたし☆海外進出も果たせた年。そしてIBOへの道のりも始まる…。
- 3年生→1年生のときの自分が信じられない…と、教科数がかなり減ったのに、試験勉強にアップアップ。記憶力の低下という衰えを感じ始めた3年生。でも、何だかとてもゆったりしていた気もする…w。



4年生→IBO、リーダー達はダイエット合宿に。3キロ減で喜んだのも束の間、見事2日で戻る…。残念。幻聴と幻振動(?)にも悩まれたね。大人の世界を知り、仲間に救われました。そして、研究の楽しさを少し、厳しさをたくさん学ぶ年…。で、新しい世界に旅立つ年…

4月からは京都民なので、京都（関西）&横浜（←実家）に来るときには、是非一報を☆4年間、どうもありがとう!! これからも、末永く、よろしく☆☆ **SEE YOU!!**

*****SPECIAL THANKS*****

昔も今も変わらずに、いろいろおバカなことして笑って、大変なことも一緒に乗り越えて、いつも心の支えになってくれた、「いつもメンバー」に。中でも特に、デキ女のエリ、足の綺麗な愛w、エンジェルいちこ、OOという名の紳士なそら君&桂君には、一層のSPECIALなTHANKSを。あっ、これで縁が切れるかと思わないでね☆甘いですw一生慕いますから、一方的にww
そしてそして、これを企画してくれたイケメンなしょういちに。

いろいろ大変だったよね。
迷惑かけてごめんなさい
&ほんとにありがとうっ。



えんやにつづく（´_ゝ´）



特集：卒業

四年一昔

村田 孝順（筑波大学 生物学類 4年）

早いもので、大学に入学してから直に丸四年が経つ。一年生の頃は自宅から通っていたので、つくばで暮らしたのは都合三年だ。この間、周囲ではさまざまな変化が起こった。つくばエクスプレス沿線は開発が進み、私が入試会場に向かう途中で電車の窓から見た剥き出しの地面は、すっかり建物で覆われてしまった。帰省の度、目にする故郷の町並みは何処かが少しずつ違っており、なんだか不思議な気分になったものだ。思えば、この四年間は色々な事があったし、いろいろな人に出会った。筑波大での生活はなかなかエキサイティングだった。

入学して最初に会話し同級生は、聞いたことのない突っ込み甲斐のある方言を操る男だった(いじっていたらいつの間にか標準語しか使わなくなった)。彼とは同じクラスになったが、うちのクラスは他にも個性的な人ばかりで、一緒につるんで遊ぶのが本当に楽しかった。あまりに楽しくて、一年生の頃は一人電車で帰宅するのをさびしく感じた。

ヤドカリ祭の時もそう、みんなが遅くまで残って御輿をつくる中、一足先に引き上げなければならず、申し訳なく感じていた。そんな中、御輿制作のときに知り合い、今でも仲の良い友人もできた。スポデーや学園祭に仲間と参加したり、友人が同級生に手当たり次第に声を掛けてスキー旅行に行ったり、山形まで免許合宿に行っって怖い思いをしたり、眠い目をこすって仲間と試験勉強したり…本当に良い思い出だ。

二年生になったときの新入生歓迎イベントも、なかなか印象に残っている。張り切って参加したのは良いものの、企画や準備の段取りが下手で、一緒に仕事した仲間も大変だったろうし、新入生が楽しんでくれたのか疑問である。他の人たちが担当したイベントが上手くいっただけに、なんだか情けなかった。一年前、自分が先輩に良くしてもらった分、後輩に楽しんでもらおうと持ったが、まあそうは上手くいかなかったかもしれない。ただ、このときをきっかけに後輩たちと知り合えたのはとても良かった。彼らは本当に良い奴らで、知り合えたことを本当にうれしく思っている。同じくらい、一緒に仕事をした仲間たちの存在を、改めてうれしく思った。

同じことは、国際生物学オリンピックや関連イベントに参加しているときにも思った。特に2009年の本番では、一緒に働いた仲間たちに、本当に助けられた。こんな地味な男の指示を聞いたり、気を遣ってくれたりしてくれたスタッフには感謝してもし切れなく、また色々苦勞を掛けたことは詫びても詫びきれない思いである。先生方にも非常にお世話になった。接点の少ない一年生や二年生と話げできたのも個人的には嬉しかった。大変なイベントだったが、四年生の最後に良い経験ができたと思う。どれもこれも、本当に良い思い出だ。自分の未熟さゆえに、人に迷惑を掛けたり失敗したことも多々あったが、まあ良い思い出だ。

なんだか取り留めのない、締まらない感じの文章になってしまった。書きたいことが多すぎてなんだかとてもまとまりがつかなくなってしまうからだ。まあ、それも自分らしいと言えば自分らしい。思い出をもっと綺麗に整えるのは、もう少し年をとってからでいいだろう。それに、あんまり思い出に浸ってばかりいると、どんどん先に進む周りに置いていかれてしまう。楽しかった思い出を背に、前進あるのみ、である。

最後に、この文集を書くにあたり、尽力してくれた方々、特に企画してくれた三年生に本当に感謝したい。私が三年生の時の今頃は、生物学演習やらにかかりきりで、先輩方のことを考える余裕などなかった。にもかかわらず、今こうして僕ら四年生のために後輩たちが動いてくれていると言う事実に、ただただありがたく思うばかりである。もしもこの文集を作るにあたり、苦勞や嫌な思いをしたとしたら、尽力してもらった側の人間として、申し訳なく思う。このような記念を残せる機会を頂いて、厚く御礼申し上げます。

特集：卒業

大学生活を振り返って

山田 祥太（筑波大学 生物学類 4年）

卒業文集というと中学生以来であるし、少々気恥ずかしい。しかも何を書いて良いかも浮かばない始末・・・。

しかし、せっかくなので、当時の自分がどんな風だったか、どんなことを考えていたかを書いておこうと思う。そうすれば、後に振り返ったときに何か思うことがあるかもしれない。だから、あまり他の人には読まれたくないなあ。

大学1年生。

授業がたくさんあった・・・。

大学生となり、今までとは違った解放感のようなものを感じたのを覚えている。一人で過ごす時間が多くなり、孤独感を覚えた。本をたくさん読んだなあ。

あまり生き物が得意ではない生物学類生なので、ウシガエルを触るなど、この大学で学ばなければ一生縁の無かったかもしれない生き物とたくさん触れ合った。

大学2年生。

授業に余裕ができ、バイトや弓道など学業面以外のことに熱心だった。

2年次の授業の取り方があまりにも偏っていて、植物に関する授業を全く取らなかったのも、さすがにまずいかなと感じ、3年次に植物生理学だけ取ったんだっけ。

すごく時間的にも精神的にも自由な一年だった。

大学3年生。

自分の将来を考えるようになり、不安な日々が多く続いた。授業以外でも自分なりに生物学を勉強した。

このときに出した結論は、

「目の前にあること、やれることを精一杯やる他ない」ということだった。

研究室を決めるということは3年次の大きな出来事だった。提出期限当日まで悩みに悩んでいた記憶がある。きっとこの決断は後々大きな意味を持つてくるんだろうけれど、この当時真剣に考えて出した結論であることは間違いない。

また20歳となって、自身の責任で決断しなければならないことが増えたと感じた一年だった。いろいろなことについて、今までどこか他人事だった事も、自分なりに考えるようになった。

大学4年生、そして現在。

1年次の項にも書いたが、生き物が得意ではない生物学類生である自分。それが今、研究の対象としてイモリを選んでいる。家族をはじめ、色々な人から不思議がられたり、面白がられているが、自分でもおかしくて仕方がない。

元々「遺伝子」と「再生医療」というものに興味を持ったがために生物学を選んで大学に入ったのだから、色々悩んだ結果として「再生」をテーマにする研究室に所属させて頂けているのだから、思いのほかぶれずに大学生活を過ごしたのだなあと思ってしまう。

また研究室で留学生の方と協力して実験に取り組むようになったのがきっかけだが、普段の会話も半分以上が英語のような状況となった。はじめはコミュニケーションすらままならなかったが、今ではとくに不自由を感じることもなく、生活できている。彼を通じて留学生の友人もすごく増えた。とても仲良くさせてもらっていて、一生を通して大切にしたいと思える人に出会えた。

総括としては、大学時代、色んなことを学べたなあという思いである。生物学はもちろん(?)、今まで知らなかったことをたくさん学んだ4年間だった。これからもこのようにたくさんのお話を吸収、勉強していく日々が続けられるよう、心掛けていきたいと思う。後悔していることももちろんあるけれど、よい4年間を過ごせたと思う。

これから先、どうなっていくのか自分でも全くわからないけれど、そのときそのときで、自分にできること、やるべきことを精一杯やって生きていきたいと思う。これが現在の自分の正直な思いである。

最後になりますが、これを読んでくれた友達、あるいは目に付いてしまった方、今までお世話になりました。「てめえには迷惑掛けられっぱなしだ!!!」って人も・・・いるでしょうね。是非是非、これからもどこかで見かけたときは適当に構ってやってください。きっと喜びますんで、自分ももちろん声掛けます! その際はとりあえず会釈だけでもお願いします。

では、またどこかで!

特集：卒業

まじかい

吉見 仁志（筑波大学 生物学類 4年）

第1話

おしゃれな小さな喫茶店に連れて行かれた。この街は3年間過ごしたけどまだまだ疎い。ほとんど通学にしか充てていない。それでもこの喫茶店は僕がいなくなってからできたもので、内装も落ち着いていてイマドキという印象だった。僕はアイスココアを頼んだ。もう一人はアイスコーヒー。コーヒー好きの僕がココアを選んだのはおなかの具合と相談した結果だ。

「先生になって高校に戻る」

その人の話を聞いた。先生か公務員か・・・といううつろにしか将来を考えてなかったから、今すでに努力しているという話を聞いていてすごいなと思いつつも、この人もあの人と一緒にだと思った。よく考えるといろんなどが似ている。

苦いからと飲み物を交換させられた。

一通り昔話と現状を話した。みんな当時知らなかったことを実話ね、というふうに話す一種の暴露大会。本当にこれは本人に言えないなという話もあった。

コーヒーの中の氷が溶けて薄くなっていた。それを無理矢理飲み干して外に出た。出たところで別のグループとばったり会った。何も変わっていないかな。幸い名前はすぐに出てきた。

みんなと離れて4年経った。この時期だから再集合の声もかかっている。どんなことになるか、楽しみだな。

第2話

あれは確か小学生の暑い夏だった。僕は学級委員をしていた。先生がお休みで自習時間にテストが用意された。先生がいない中で行われたテスト。当然ざわめきだす。学級委員として僕は注意する。

「静かにしてください」

1回で言うことを聞くはずもなく僕は何度も注意を促した。そうこうしている間にテストは終わり、そのテストが返却された。

僕は人生で初めて0点をとった。

「・・・」

理由はよく聞くことだ。名前が書いてなかった。ただそれだけだったが当時の僕にはかなりショックだった。その日僕は泣きながら帰路についた。

それから約10年の月日が流れた。ひょんなことで地元の親しい友人と会うことになった。

「お前昔0点とって泣きながら帰ったろ」

「0点は取ったけど、泣いてねえし」

第3話

この場合はふつつ隣に座るべきなんだろうけど僕は向かい側に座っている。そんなにいい関係ではないのにこんな状況になっているのは

「おいしいものが食べたい。」

という一言。遠くまで食べに連れてってせっかくここまで来てそこでさあ帰りましょうなんてことにはならない。友達へのお土産と称していわゆるスイーツのコーナーに連れていかれる。たいして買わないのに長時間付き合わされるのはもう慣れたし、この流れはいつものことなので、またかという気になるだけ。この日はこの後が違った。

多分有名なんだろう。建物を出てすぐにそびえ立つもの。名前は知らないけど真ん中に時計があってというこの建造物はテレビでも見たことがある。ちょうど日が沈みかけてそこに向かう人が増えてきた。

「行ってみる？」

有名どころだから実際行ってみるのもいいと思ったし、二人だけになる時間がほしかったのも事実だったから、僕は了承した。

その建造物以外は意外にも地味に見えた。たぶんそれ以外はもう閉まっているからだろう。これだけはこれからが本番だから、これだけ光っているのだろう。どういう顔をしていいのかわからないまま写真を撮られ、僕らは乗り込んだ。

向かい側に座る。たぶん今はこの距離がちょうどいい。高い高い。

「きれい」

その目はあまり見えてないはずなのに、その目には何が見えているのだろう。いつまでたっても解らないからこうなるんだろうけど、たぶんこれから先も解らない。ただ、その目にはきれいなものが見えている。

じゃあその目にたくさんきれいなものを見せてやるか。

そう思ったのは、確かにその景色がとても美しかったと本当に思ったから。人間が創り出したもののくせに、くやしかったから。

特集：卒業

4年間を振り返って_♫(-ω-)

四谷 紗和子（筑波大学 生物学類 4年）

教育実習にいったとき「大学はどんなところですか?」という質問を受けました。わたしは「へんなところですよ」と答えました。いま大学4年間を振り返って「大学はどんなところでしたか?」と聞かれたら、わたしはやっぱり「へんなところでした」と答えます。

高校時代、わたしのまわりに生物好きな人はほとんどいませんでした。でも大学に入ったらまわりは生物オタクばかりでした。

愉快的な友だちとすてきな先生方に囲まれて、好きなことだけ勉強できた4年間でした。とても楽しかったです。

えんやにつづくo(ゝω・*)o

特集：卒業

一言集

皆さん、お元気で。健康第一です。

200610733 井口悠也

4年間の大学生活、あっという間だった。けど濃密だったかな。
学祭で騒いだり。新歓でみんなと働いたり。実験であばれたり？
酔いつぶれたり。全部いい思い出♪

みんな、Thank you☆そして、これからもよろしくっ！！

それでわ、

えんやにつづく(ノ>皿<)ノ

200610751 木越悠

4年間、大学では色々な人と出会い、人生の幅が広がりました。
出会えた全ての

人に感謝です。たくさんバカもやりました。人生の幅が広がりました。友人達に

感謝です。そして…文集ページの…えんやにつづく！！

((;° 皿°)

200610779 武部愛

短くて深い4年間でした。これから先、友人たちとこれほど濃い時間を過ごすことはきっとないでしょう。大学という空間から、たくさんの経験と思い出をもらいました。また何処かで出会えることを願っています。

200610807 前原一慶

特集：卒業

☆寄せ書きのページ☆

卒業文集作成委員

丸尾先生(総監督(ボス))

石川翔一(企画・作成・筋肉)

庄司秀亮(編集・編集したっぽい雰囲気)

藤田咲也(表紙)